

ユクモ村の狩人録

箱の中の世界

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この物語は

ユクモ村一のスキルバカだけどやるときはやるハンター トールと

ユクモ村一のしっかり者だけどちよつとどこかぬけてるハンター ユーカが色んなハンターの出会いやモンスターと戦いながら成長していく……そんな物語……

※9月14日 あらすじの変更を行いました。

目次

二人の狩人	1
狩人の双舞踏	6
二人の過去話	18
狩人の晩餐	25
溪流での異変	30
黄金に輝く火竜	36
溪流の恐暴竜	46
ユーカの決別	54
異変の終結	63
番外編：孤島の海で……	69
番外編：ツールと変人と弓使い	79
ある意味平和なユクモ村	90

狩人の里帰り	94
狩人の里帰り【歓迎会】	100
狩人の里帰り【歓迎会・続】	106
狩人の里帰り【農場探検】	114
狩人の里帰り【その頃のユクモ村】	124
狩人の里帰り【嵐の密林で】	132
設定	146
狩人の帰投	151
溪流の雷狼竜	157
戦線離脱	165
二頭の雷狼竜、そして	171
異形の雷狼竜	178

金の雷光纏いし雷狼竜

—

185

二人の狩人

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

温泉で有名なユクモ村。その集会浴場に二人のハンターがいた。

「なあユーカ、今日はどんなクエストに行く？」

へヴィボウガンを担いだ一人の男性ハンターが隣にいる大剣使いの少女・ユーカに尋ねた。

「ん、私は別に何でも良いけどな……」

「トールはやりたいクエストってある？」

トールと呼ばれるへヴィボウガン使いの少年は呆れた顔で答えた。

「いや、質問を質問で返されても困るのだが……」

「そうだなあ……この【凶暴の宴】ってどうだ？ 闘技場でイビルジョー2体狩猟なんてワクワクしねえか？」

「……ねえ、トールは私がイビルジョー嫌いな事知ってそのクエスト選んだでしょ……」
「わりの、その通りだ。実はユーカの反応が面白いから意地悪してみたくなったんだよ、すまん」

「ふんっ！トールなんてギギネブラに捕食されて力尽きちゃえばいいのよ！」

「んなっ!?なんて事言うんだよ！ふざけんなよ！」

「うるさいっ！」

二人の喧嘩が集会浴場に響くなか、受付嬢がその二人の喧嘩を中断させようと話しかけた。

「あ、あの……お二人さん……昨日届いたばかりの新しいクエストがあるんですけど……」

その言葉を聞いて先に反応したのはトールであった。

「受付嬢さん！その話詳しくしてもらっても良いですか!?!」

「ちよっ、トール！何抜け駆けしようとしてるのよ！」

「うるせえ！新しいクエストに興味があって何が悪い！」

「誰が悪いって言ったのよ！抜け駆けしないでっただけじゃない！」

「あ、あの……その……お二人さん？クエストうけr……」

『うるさい！』

「ひいっ!?!」

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

この時の様子を見ていた番台さんはこう語る。

「受付嬢を怯ませるほど二人の剣幕はとても恐ろしかったニヤ」

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

あの後、クエストの説明を受けた二人は一度自室に戻り装備を整えていた。

【トールの部屋にて】

「ふむ……【電撃の双舞踏】か……ギギネブラ亜種の同時狩猟……アイツの弱点は水属性だったよなどんな武器にしようかな……」

と、言っつて自分のアイテムボックスを漁り始めた。

数分後ある武器を見つけたトールはその武器を持ち上げながら叫んだ。

「おーこれは！久しぶりに使ってみようかな……」

トールが持ち上げた武器……それは

【**覇砲・ユプカムトルム**】であった。

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

【ユーカの部屋にて】

「うーん……ギギネブラ亜種よね……弱点は水よね……」

でも、水属性の武器って切れ味が良いのがあまりなかった気がするし……」

そんな事を言いながらアイテムボックスを見ていたユーカはある武器を見ながら微

笑んだ。

「これなら大丈夫!……かな?」

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

準備を終えた二人はクエストの受付を終え、出発の準備をしていた。

「よっ! ユーカ。防具はファルメルシリーズか? んで武器は……暗夜剣【宵闇】か!」

「ふふん! そうよ! 雷耐性もあるし、耳栓も付いてるのよ? 完璧なるギギネブラ亜種対策防具よ!」

「流石ユーカだな……モンスターの属性も考えて防具を選ぶ所とかもうユクモ自慢のハ
ンターって所だなあ……」

「……ところでツール? その防具ってなに?」

「これか? この防具は火事場特攻って言うてな! 発動スキルは【火事場+2】【攻撃力UP大】【弱点特攻】他にもあるが、重要なのはこの3つでな? この3つが発動すれば攻撃力が800を越える火力を叩き出せるんだぜ? すげえだろ? あ、ちなみに武器は覇砲ユ
プカムトルムだぜ」

と、ツールはユーカのいる方向を向くが、そこにユーカはいなかった。

「ありや? ユーカ? どこだ?」

周囲を確認するとユーカは呑気に温泉ドリンクを飲んでいた。

トールの視線に気付いたのかユーカはこっちを見ながら手を振った。

「おい、トールー！途中であんたが語り始めたからここでボコボココーラ飲んでたー！」
「ひでえ！何で俺が語り始めると温泉ドリンク飲み始めるわけ!? 訳がわからねえよ！」
そう言いつつも、自身も温泉ドリンクを飲み込みに浴場に入っただけだった。

ゴクツゴクツゴクツ

「プハア〜！やっぱり飲むならライフルーツジュースだな！なんてったて【ネコ火事場】
が発動するからな！これで俺の攻撃力は……」

スキル発動で暴走し始めるトールをユーカは無視しながら浴場を後にするのであつた。

「トールー！置いてくよー！」

「あつ!?ちよつ待て！いや、待ってください！」

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

続く

狩人の双舞踏

闘技場に向かいながらツールとユーカは今回のクエストの確認をしていた。

「さて……今回のクエストは闘技場でギギネブラ2頭の同時狩猟……だよな？ユーカ？」

「そうよ。ツール、そんな事も覚えてないの？クエストを受けたのついさつきじゃない」「いや、ただの確認だから……」

一応言っとくが、今回の狩りは同時狩猟だからけむり玉を闘技場に入ったらすぐ使う。んでもって一体ずつ各個撃破していく。これで良いか？」

「ええ、大丈夫よ。けむり玉は先に私から使わせてもらうけど良いかしら？」

「ああ、問題ないぞ」

「ありがと、さて、闘技場に着いたわね」

闘技場の入り口で二人は一度立ち止まり、顔を見合わせた。

「行くぞ！」「行くわよ！」

ほぼ同時に声をあげた二人は闘技場の中に走っていった。

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

闘技場に入った瞬間ユーカは事前の会話通りけむりを地面に向けて叩きつけた。

ボシユウウウ……………

「ケホツ…………相変わらずけむり玉のけむりは慣れないわね…………」

けむり玉のけむりにむせるユーカをよそにトールはボウガンの適正距離につき、ギギネブラ亜種に照準を合わせていた。

自身の近くに大タル爆弾を置きながら。

「さあ、火事場発動の為の爆弾特攻の生け贄としてキミには一役買ってもらおうよ」

そう言ったトールは砲砲ユプカムトルムの引き金を引いた。ユプカムトルムから放たれた弾丸はギギネブラ亜種の頭部に直撃した。

『ゴアアアアアアッ!!』

その一撃でこちらに気付いたギギネブラ亜種は咆哮をあげトールに向かって突進してきた。

「ちよつとトール!?!何で逃げないのよ!」

トールはユーカの忠告を無視し自分に向かってくるギギネブラ亜種に動じもせず、ただ、銃口を大タル爆弾に向け続ける。

「…………あと少し」

ギギネブラ亜種がトールの目前に迫った瞬間――

「今だっ！」

トールは大タル爆弾に向けていたユプカムトルムの引き金を引いた。

ドオオオオオオッ！！

『ゴアアアッ!?!』

大タル爆弾の爆発に巻き込まれたギギネブラ亜種は一時的にであるが、動きを止めた。

「いてて……流石に爆弾特攻はキツいな……」

先程の爆弾特攻で体力の7割程失ったトールだが、その顔に後悔の色はなく、むしろやる気に満ち溢れた顔をしていた。

「これで準備は整った！見せてやるよ……瞬間攻撃力800の恐ろしさをな！」

「トール何してるの！回復しないと！」

スキル発動でテンションがおかしくなっているトールにユーカが一喝した。……が件のトールはユーカの声も聞かず、ギギネブラに向けて通常弾を撃ち続ける。トールの放つ通常弾はギギネブラ亜種の弱点である頭部に確実に当たっている。

しかし、ギギネブラ亜種も撃たれるだけではなかった。体内で作られる電気を口から放った。

「うおっ!?!」

トールは自身にせまる雷球を間一髪避けることができた。

「おい！ユーカ！そつちに雷球がいったから気を付けろ！」

「はいはい、わかつてますよ！」

ユーカはギギネブラ亜種の雷球を横に回避することで防いだ。

「ユーカ！通常弾が直に足りなくなる！調合するからその間の時間稼ぎ頼む！」

「了解！……つと、その前に……」

ユーカは薄れかけてきたけむりに気付き、けむり玉を地面に叩きつけた。

「さて、トールが調合してる間の時間稼ぎはさせて貰うわよ？」

ユーカは背負っていた暗夜剣「宵闇」の柄に手を添えながらギギネブラに向かっていった。

（トールが集中的に頭部を攻撃してたからもう頭部の部位破壊はできそうね……）

ユーカはギギネブラ亜種の頭部に大剣の抜刀切りを放った。予想通り、トールの攻撃でダメージが蓄積していたのかギギネブラの頭部の電撃腺が潰れた。

（やっぱり予想通りね……）

ユーカが頭部の電撃腺を潰した直後、ギギネブラ亜種の体色が赤く変色した。

「おつと……お怒りのようね」

ギギネブラ亜種は咆哮をあげたが、ユーカは高級耳栓のおかげで、怯む事なく、攻撃

を続けていた。確実に溜め切りをギギネブラに当てるユーカであったが、攻撃に集中しすぎていたため、ギギネブラの放電に気付くのが遅れてしまった。

「まずい！間に合わない！」

ギギネブラ亜種が放電を放とうとした瞬間一発の弾がギギネブラに当たりはじけた。そのはじけた弾は爆風を生み、ユーカを放電の範囲内から弾き飛ばした。

「キャッー！」

爆風で飛ばされたユーカが体勢を立て直すと、ツールがユーカの方を向きながら「すまねえな、ユーカ。この方法しかなかった」

と、謝ってきた。

「しょうがないわよ、ガード強化のスキル付けてないこの防具だったらあの技で麻痺状態になってプレス攻撃受けてたかもしれないし……」

でも、このクエスト終わったら農場の収穫手伝いなさいよ」

ツールは「ほーい……」と返事をし、ギギネブラ亜種に銃口を向け撃ち続ける。

「ユーカ、いつも通り捕獲のタイミングは頼むぞ」

「はいはい、ちゃんと捕獲用麻酔弾頼むわよ」

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

「ふう……やつとー体目の捕獲ね」

「ああ……こりやあ時間がかかりそうだな」

1体目の捕獲を終えた二人はモドリ玉を使いベースキャンプに戻ってきていた。ユーカは体力と砥石で武器の切れ味を回復させていた。トールは使用する弾の調査を行っていた。

「さて、私は体力も回復したし、準備はOKだけどトールは？」

「ああ、俺も準備は完了してるぞ」

「そ、なら良いけど」

その……体力はどうかならないの？流石にそのままだと一発受けたら力尽きると思うけど？」

「いや、大丈夫だ。と言うか回復したらスキルが発動しなくなっちゃうしな」

「まあ、いいわ。さっさと2体目の捕獲に行きましょう」

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

闘技場に入った二人に気付いたギギネブラ亜種は咆哮をあげ、プレスを放つ行動に入った。

「ユーカ！雷球がくるぞ！やつの側面に回り込め！」

ギギネブラ亜種に正面から向かっていたユーカはトールの助言の通りギギネブラ亜種の側面に回り込み、抜刀切りを食らわせた。

トールはユーカに助言をした後、闘技場に存在する高台に登っていた。

「ユーカ！ 奴をこつちに誘導してくれ！」

「了解！」

ユーカがトールの指示に従ってギギネブラを誘導しようとしたとき、ギギネブラ亜種が頭を上げ、ユーカ覆うように攻撃してきた。

「つ！！ユーカ危ない！」

「え……」

ギギネブラ亜種の行った攻撃、「拘束攻撃」。トールはその前兆を分かっていた。闘技場に入った時、ギギネブラ亜種は疲労していた。それをユーカに伝えずに向かわせたトールは全ての原因と言っても過言ではない。

「クソツ！！」

トールは武器を納め、アイテムポーチからこやし玉を掴むと全速力でギギネブラ亜種へ向かって走っていった。

（ギギネブラ亜種の拘束攻撃は振りほどけないと大ダメージを受ける……：雷耐性のあるファルメルシリーズでも防御力はそれほど高くない。下手をすれば力尽きてしまう。間に合え！）

ギギネブラ亜種にこやし玉が当たるであろう距離まで近付いたトールはこやし玉を

ギギネブラ亜種目掛けて投げつけた。

『ゴアア——アツ!?!』

「あ……ありがと……トール」

「ユーカ! さつきと回復しろ! ここは俺がやつの気をひいておく!」

「う……うん……」

トールはアイテムポーチから角笛を取り出し、吹き始めた。

ブオオオオオオオ……

その音色に反応したギギネブラ亜種がトールに敵意を向けプレス攻撃を放った。

角笛を吹き終わったトールだったが、既に雷球がトールの近くに迫って来ていた。

「こりやー落ちかな……」

トールが諦めかけていた時

キイン

トールに迫って来ていた雷球をユーカが暗夜剣「宵闇」で防いだ。

「これでさつきの借りは返したからね?」

ユーカが微笑みながらトールに言った。

「ユーカ、ありがとよ」

ユーカの微笑みにトールも笑って返した。その後、トールは再び走り、ある程度距離

を取ってからもう一度角笛を取り出した。

「ユーカ！今のうちに落とし穴の設置を頼む！ついでにその上に大タル爆弾Gを二つ置いといてくれ！」

「ほいほい」

ブオオオオオオオ……

トールが角笛を吹き始めるのと同時にユーカは自身のアイテムポーチから落とし穴を取り出し、地面に設置し、大タル爆弾Gを置いた。

「トール！準備出来たわよ！」

ユーカの合図で落とし穴の設置してある方向に向かっていき、落とし穴の上に大タル爆弾Gを置いた。

「さあ……こい！ギギネブラ亜種！」

トールはユプカムトルムを構えながらギギネブラがこちらに突進してくるのを待った。

しかし、ギギネブラ亜種は突進を行わず、ブレスの体勢に入った。

「んな!?!」

ザシユツ

ザシユツ

ザシユツ

何か鋭利なものが刺さる音が聞こえた。ギギネブラの方に目をやるとギギネブラ亜種が麻痺状態になっているのがわかった。

『ゴアアツ——ゴアアアツ……』

「まさか……」

ユーカを見ると、ユーカは投げナイフを片手にギギネブラ亜種に投げナイフを投げつけていた。流石にギギネブラ亜種は体の中で電気を作るだけあり、長い時間麻痺の効果は得られなかったが、ブレスを止められたのはとても大きい。

麻痺の束縛から解かれたギギネブラ亜種はユーカ目掛け、突っ込んできた。

ユーカはギギネブラ亜種を落とし穴まで誘導すると、横に回避した。

そして

『ゴアアアアアツ！ゴアアアツ！』

ギギネブラ亜種は見事に落とし穴に落ちた。

「トール!!」

「おうよー」

ユプカムトルムから放たれた弾丸は大タル爆弾Gに当たり、大爆発を起こした。そしてその爆心地にいたギギネブラ亜種は……

『ゴ……ゴアア………』

2度と動くことなく、力尽きていた。

「クエスト………終了！」

「お疲れさまだな、ユーク」

クエスト結果

狩猟時間 25分40秒

報酬金額 13200z

クエストクリア

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

クエスト終了後、集会浴場にて

「ふう………今回のクエストは結構難しかったな」

「そうかしら？ トールがバカみたいな事しなければもつと早く狩れると思うけど？」

「バカって何だよ！ バカって！」

「はいはい、バカはバカってこと……」

あ、あとの防具は一緒にクエスト行くときは使わないですよ？ こつちが一緒にいてヒ

ヤヒヤするから」

「えー……なんでお前に決められないといけないんだよ……」

「はいそこ文句言わない」

「ほーい……」

二人の過去話

「ここは温泉で有名なユクモ村。そんなユクモ村の集会浴場にハンターが二人……」

「ねえ、トールどうしたの？ さっきからブーツとしてるけど」

ユーカは隣でお湯に浸かりながらブーツとしているトールに聞いた。

「ん……ああ、すまんユーカと狩りに行ったのなんて久しぶりな気がしたからさ、昔の事を思い出してたんだよ」

トールにそう言われ、ユーカも昔を懐かしむように口を開いた。

「そう……ね、確かにトールと狩りに行ったのは久しぶりな気がするわね」

「だよな、俺らが始めて会ったのってユーカが俺の父さんの訓練受けに来たときだったよな」

そう言い、トールは昔の事を語りだした。

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

「おとーさん！ 今日の訓練って何するの？」

幼き日のトールの声が家の中に響く。

「そうだなあ…」

「そうだ、今日は大剣の訓練だな」

「えー！昨日も大剣の練習したじゃん！」

「トールは父親の答えに愚痴をこぼした。」

「しようがないだろ？今日は大剣の訓練を受けたいっていうハンター志望者がいるんだからな」

「ついでに言っておくとソイツはお前と同じ年だぞ」

「え……本当!?仲良くできるかな!？」

「ハハツ…さすがトールだなあ」

「おーい、入っていいぞー」

父親が玄関の方にいるであろう誰かを呼ぶと、玄関の扉が開き一人の少女があらわれた。

「紹介するぞ。この子は村長の家に住んでいるユーカちゃんだ」

「えつと……その宜しくお願いします。」

これが、トールとユーカの初めての出会いであった。

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

トールの父親が訓練の準備のために家を出ていつている間、二人は会話で盛り上がっていた。

「どうしてユーカちゃんはハンターになろうと思ったの？」

「わたしは…お母さんがこの村のハンターだったから…かな」

「へえ！ユーカちゃんのお母さんってハンターなんだ！俺のおとーさんと同じだな！」

「フフツ…そうだね」

でもわたしのお母さんとお父さんずいぶん前にこりゅー？ってのを討伐しに行つてから帰つてきてないの……」

そう言うとうとユーカは下を向いてしまった。

「あ……あのごめん！嫌なこと言っちゃって…」

「え!?そ…そんなことないよ」

わたしの方こそきをつかわせちゃつてごめんなさい」

そう言い、二人は同時に頭を下げた。

そのタイミングで準備を終えたトールの父親が家に帰つてきた。

「おーい、トール、ユーカちゃん準備でき…何やってんだ？二人とも？」

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

トール、ユーカは闘技場の中でトールの父親の講義を受けていた。

「さて！今回の訓練だが……まずは大剣の基礎からだ

大剣は『切る』というより刀身の重さにより『切る』という感じの武器だ。そのため、使用者は大剣の重さに耐えられる体を作ってもらわなければならない。特に、大剣は武器を出したまま走るとは難しいほど重量がある。逃げる際はしっかりと武器を納刀してから逃げるのだ。さて、二人ともそこにあるボーンブレイドを持つてみる。因みに、ボーンブレイドは俺が知っている大剣の中では一番軽い大剣だからな」

と、トールの父親に言われた二人は指示通り大剣を持ち上げてみることにした。

「よい……しよつと……おとーさんいい加減他の武大剣も持たせてよ」

「ダメだ。父さんがハンターになるための訓練を受けていた頃はまずは武器についての基礎を勉強してから武器を持つてまで1週間はかかったんだぞ？だからその大剣を自由に扱えるまではおあずけだ」

「ちえつ……なあユーカちゃん手持てたk……ユーカちゃん!？」

ユーカの方に目をやったトールが見たのは、大剣を持つのに力み過ぎ、顔を真っ赤にしているユーカだった。

「ユーカちゃん！無理して持つことないんだよ！だからそんなに力まなくても……」

トールがユーカを説得しようとしているとユーカが言葉を漏らした。

「お母……さん」

「え？」

「お母……さん……みたいにならいたい。村の役に……立ちたい……」

その言葉を聞いたトールは頭をハンマーで叩かれたような衝撃を受けた。

（そうか……ユーカちゃんはお母さんの代わりのハンターになるためにがんばってるんだ……なら俺も……）

「ねえ、ユーカちゃん」

「……ん？」

「大剣を持つときのコツは姿勢にあるんだよ。無理に持つんじゃなくて、足を肩幅くらいに開いて……」

トールのユーカに対する指導をトールの父親はその様子を微笑みながら見ていた。

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

あれからユーカの腕はどんどん上がって行き、先に始めていたトールと同じほどに上達していた。

「うむ、初めは大剣を持ち上げることすら出来なかったユーカちゃんだったが、よくここまで上達した！これで大剣の訓練は修了だ！」

「ありがとうございます！」

笑顔でトールの父親から証書を受け取ったユーカはトールのもとに駆け寄り、その証

書をトールに見せつけた。

「トールくん！わたし大剣の訓練無事に修了出来たよ！」

「おめでどうユーカちゃん！これで将来狩りに出ることが出来るようになったんだね
！」

「うん！でもわたしが合格できたのはトールくんが教えてくれたからだよ、ありがとう
ね」

トールは「ありがとう」の一言に照れながらも笑顔を見せた。

その様子をやはり見ていたトールの父親は、

「青春してるなあ……」

と、呟いたがその一言は二人に届くことなく風とともに流されていった。

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

昔話を終えた二人の顔には微笑んでいた。

「なんか懐かしい気分ね」

「あれからもう9年たってるからな……」

お、ドリンク屋さーんユクモひやしあめふたつ！」

「了解ですニヤ！」

トールの注文を受けたドリンク屋はユクモひやしあめを作ると、トールのもとに持ってきた。

「ご注文の品ニヤ、ごゆつくりとしていくニヤ」

「ほれ、ユーカお前の分」

ドリンク屋からドリンクを受け取ったトールは1つのドリンクをユーカに渡した。

「え…いいの？」

「気にするな、奢りたい気分だったから奢っただけだ」

「フフツ、トールくんらしいね」

「ん？なんか言ったか？」

「何も言っていないわよ」

そう言いユーカはドリンクを飲み始めた。

狩人の晩餐

ドリンクを飲み終えた二人は温泉から出て食事をとるためにユーカの家に向かった。

「なあ、ユーカ。どうして急にお前の家でご飯食べるんだ？」

「別にいいじゃない。ドリンクのお礼がしたいだけよ。トールは嫌なの？」

「そんなわけないけどさ……」

「けど？」

「……なんか裏がありそうで」

「うぐ……」

「うぐ？」

「な、何でもない！さ！早く家に行きましょ！」

「ちよ、ユーカ！引つ張るなって！」

自分の考えを読まれたユーカは誤魔化すようにトールの腕を引つ張り自分の家に向かつていった。

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

ユーカの家に着いたトールはユーカの言う通りに席に座り、ユーカが料理を持ってく

るのを待っていた。

（しっかしユーカは一体どんな理由で俺を誘ったのか……でも料理を振る舞いたかったのは本心のようにだったしな……）

ま、ご馳走になればいいか！

トールはユーカの手料理に期待しながら待つことにした。

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

「さて……料理に誘ったもの何を作ればいいのか……」

ユーカはそう言うときアイテムボックスを確認する。

「使えそうなのは……アプトノスの生肉とファンゴの生肉、トウガラシにハチミツ……かな？」

ユーカはアプトノスの生肉とファンゴの生肉を見比べながらどちらの肉を使うのか迷っていた。

アプトノスの肉は脂が丁度いいぐらいにのっており、そのまま焼く、またはハチミツを使い照り焼きにすると抜群に美味しくなる。一方、ファンゴの肉は独特の臭みがあるもの、トウガラシなどの香辛料で臭みを除けば、癖になるほど美味しくなるのである。

「うーん……今日はアプトノス肉の照り焼き……かな？」

暫く考え、答えが決まったユーカは料理の為にナイフを取り出すと、アプトノスの肉

に切り込みを入れ、ハチミツをかけ、肉にハチミツを浸透させた。その間に火打ち石で火をつけ熱伝導の良いマカライト鉱石の鉄板を温め始めた。

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

肉の下ごしらえが終わり、温まったマカライト鉱石の鉄板に肉を置く。

ジユウウウウウウ：

調理場に美味しそうな香りが広がる。暫く経ち片面が焼けた事を確認したユーカは肉をひっくり返し、もう片面に火を通し始めた。

あと数分経てば照り焼きは完成するだろうその間にユーカはデザートの水結イチゴを皿に盛り付け、トウガラシと落陽草とハチミツをまぜ照り焼きにかけるソースを作った。

「もう焼けたころかな」

ユーカが肉を確認しに行くと言想通り肉はこんがり焼けていた。ユーカは完成した照り焼きを皿に乗せると、先程つくったソースをかけトールの元に料理を持っていった。

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

「んで、俺に何を頼みたいわけ？」

肉を頬張りながらトールはユーカに自分を誘った理由を聞いた。

その質問にユーカは顔を赤らめながら答えた。

「実は…手料理を食べて欲しかっただけ…：…なんだけど…」

ユーカのその返答に二人の間に沈黙が生まれた。

「え？」

「な、何よ…」

「いや…：…何か裏があるとずっと思ってたから」

「なんか心外なんだけど…：…」

「まあ、料理は美味しいから別に俺は満足だぞ？」

「ほ、本当!? それなら良いけど…」

『美味しい』の一言がよほど嬉しかったのか、ユーカの表情が笑顔になった。

(全く…：…ユーカは相変わらず分かりやすい奴だな…)

トールはそう思うと自然と笑みがこぼれた。

(また今度もユーカに料理を作ってもらおうかな。今度は一緒に材料を採りにいってか
らにしようか)

———二人がそんな時を過ごしているときユクモ村の近くの溪流ではある事件が

起きていた。

溪流での異変

——夜の溪流にて

「ハアハア……クソツッ！銀レウスがいるなんてきいてねえぞ！」

「しようがないですニヤ！それより今は逃げる事を優先するニヤ！」

「わかってるって！」

ユクモ村ではみない防具を着た男性であるハンターとオトモアイルーは愚痴を言いながら自分を追いかけてくる銀火竜から距離を取りながら別のエリアまで走っていく。

「あと少しでエリア2だ！急げ！キャラメル！」

「はいですニヤ！」

ハンターとキャラメルと呼ばれるオトモアイルーは全速力で駆け、銀火竜から逃げ切る事ができた。

「ハア……ハア……ここまで来れば銀レウスもこな……」

「ニヤニヤツッ!?あそこに大型モンスターがいるニヤ！」

「なっ!?まさか金レイア!？」

そのハンターの声に反応した様に金火竜は咆哮をし、咆哮で怯んでいるハンターに向

け突っ込んできた。

(クソ……これはヤバイぞ……)

咆哮の怯みから解かれた時すでに金火竜はハンターのすぐ近くまで迫っていた。

「チツ……キャラメル！俺には構わないで遠くに逃げろ！」

「ニヤ!? フレイはどうするニヤ！」

「どうにかする！」

その声をきいたアイルーは遠くに走っていった。

その様子を横目で確認したフレイと呼ばれるハンターは金火竜の突進を受けエリア2の崖に落ちていった。

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

「おーいツール！起きてるかー？」

早朝の家に父親の声が響く。

「ん……なんだよ父さんこんな朝早く……」

眠い目を擦りながらツールは父親のもとに向かうと、そこにはいつもの教官している時に着ている防具ではなく狩りに行くときの防具を着ている父親がいた。

「父さん……なにかあったって事か？」

「ああ、その通りだ。実はな……」

父親の話によると昨日、ユクモ村に向かっていたハンターが溪流の近くを通っていたときに銀火竜の襲撃を受けたらしい。そのハンターは銀火竜から逃げきったらしいが逃げた先のエリアで金火竜と遭遇し、崖から転落……したらしい。その時ハンターはオトモアイルーを逃がし、そのオトモアイルーがベースキャンプで倒れているのを溪流の視察に向かった父親が発見し、事態が発覚したそうだ。

「何で溪流に金・銀火竜が？」

「実はリオレイアの産卵期らしい。エリア8の巣はわかるよな？あそこの卵を守るために2体がピリピリしてらって訳だ」

「トールは父親の話を聞いて納得したような顔になったがーっただけ謎に思った事があつた。」

「なあ父さん」

「ん？どうした？」

「金・銀火竜が溪流に住み着いたのはいつ頃？」

「それか……実は住み着いたのはそのハンターがくる前日……くらいらしい」

「なるほど……それならギルドの対応も遅れた訳か……」

「ああ、知っていたらハンターを呼んだりはしないから……」

とにかく、だ。さっさと準備をしてハンターの捜索に向かうぞ」

≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡≡

準備を終え、ギルドのもとに向かったトールはすでにギルドに来ていたユークと共に依頼を出したオトモアイルと話を聞いていた。

「どうもよろしくニヤ。キャラメルっていうニヤ」

「どうもキャラメルさん」

「そのハンター……フレイさん？は崖から転落したつてことよね？」

「そうニヤ。金レイアはとってもピリピリしてたニヤ。フレイを見失った後もその場で威嚇してたニヤ」

その返答を聞いてトールは金火竜が産卵期だということを実感した。

(これはちとまずい事になったな……)

産卵期……と聞いてトールが最初に思い出すのは砂漠の暴君ディアブロス亜種である。実際、ディアブロス亜種は産卵期のメスの体色が黒く変化したものである。通常状態のディアブロスと比べて格段に攻撃力が上昇しており、突進時のスピードも速くなっている。

「……今回の相手は手強いかもしれないな」

「なんかいつも以上に深刻な顔してるわね……」

「ああ、産卵期のメスは判断力が通常状態より高いからな……」

それに今回は金・銀火竜が一緒ってことがより難易度を上げてるからな……」

「そうね……2体一緒ってことはどちらかのピンチになると2体そろっちゃう可能性もあるし……」

「だからそれを考えて闘わないと行けないな」

二人が考えているとギルドの方から二人を呼ぶ声があった。

「おうチミたち、今回の依頼は溪流での行方不明ハンターの搜索だ。2頭の飛竜を狩猟しつつ、そのハンターを助けてほしいってことだ。だが、1つ気になる事があつてね」

「気になる事？」

ギルドマスターのその言葉にユーカは首を傾げる。

「おう、最近溪流のモンスター個体数が減っていてね」

「それって金銀火竜が食べてるんじゃない？」

「それが2体が住み着く前から減っているわけだ」

「住み着く……前？ならもう1体別のモンスターがいる可能性があるって事ですか」

「うむ。その事も考えて今回のクエストはちと難易度を高めに設定してあるわけだ。だから本当は2頭を狩ってほしいが無理と判断したならハンターの救出だけでも大丈夫だ」

「わかりました。ですが一応ベースキャンプには村にすぐ帰れるようにガーグア荷車だけでも頼めますか？」

「ふむ……チミがそう言うならそうしようじゃないか」

「ありがとうございます」

トールはギルドマスターに頭を下げた。

「さて……チミたち頼むよ？」

「はい！」

依頼内容【ハンターの救出】

依頼者 キヤラメル

依頼場所 溪流

狩猟対象 リオレウス希少種

リオレイア希少種

達成条件 2頭の狩猟、ハンターの救出

(危険な場合、ハンターの救出のみでも可とする)

二人は依頼書に名前を書くとき溪流に向かって行った。

黄金に輝く火竜

「……なあ、ユーカ。確かに変な感じがしないか?」

溪流に着いてトールは溪流の微妙な変化を感じた。

「ええ……そうね。なんと言うか静かすぎる気がするわ」

トールと同じことを感じていたユーカはその問いに答える。

「さあ、今回の依頼者の主人を助けに行くぞ」

「そうね、行きましょう」

そう言葉を交わすと二人はエリア2に向けてベースキャンプを出発していった。



二人はフレイが落ちたであろう場所に着くと大声でフレイの名を叫んだ。

「フレイさーん!大丈夫ですかー!」

トールの呼び掛けに応じる者はいない。

「……なあ、ユーカ……フレイさんは生きてると思うか?」

「なっ!?トールなにバカな事言ってるの!?!」

「すまん、言い方が悪かった。この高さから落ちてケガしないで済むと思うか?」

「それは……」

あり得ない、とユーカは思った。例え沢山の狩りで体を鍛えていたとしてもこの高さ、更にゴツゴツした岩肌だと、多少のケガを負っている可能性が高い。

ましてやエリア3の橋とは違い、着地する場所の足場の状態が分からない。

「多少のケガを負っている可能性があることは覚えていた方がいい……ってこと？」

「ああ、そう言うことだ」

そんな時だった。二人の上を大きな影が通った。

「!!」

二人はその影の正体が飛竜だと気付くと背負っている武器、トールは『王牙刀【伏雷】』を、ユーカは『暴砂剣シムシアル』を構えた。

二人が構えるのを待っていたように飛んでいた黄金に輝く飛竜・リオレイア希少種が二人の前に着地した。

「来たぞ……」

「わかってるわよ……」

『グオオオオオッ!!』

二人に気付いたりオレイア希少種は咆哮をすると二人に向かって突進しはじめた。

(父さんの言う通り繁殖期の可能性が高いな……気を付けないとな)

トールは向かってくるリオレイア希少種の側面に回避し、ユーカはトールの反対側に回避した。

そして、突進後の隙を狙い、二人はリオレイア希少種に攻撃を仕掛ける。

「オラッ！」

「ハアッ！」

二人に攻撃を受けたリオレイア希少種はトールに攻撃の矛先を向けると、二歩ほど後ろに下がり、空中で体を回転させ反撃を行った。

「うおっ!?!サマーソルト攻撃か!」

攻撃の前兆を見極めていた二人は範囲からずれる事で攻撃を回避した。サマーソルト攻撃を終えた金火竜は着地をしようとする。それを好機だと思ったトールは王牙刀を構えながら金火竜を斬りにかかる。

しかし、リオレイア希少種は着地しようとはせず、空中でもう一度サマーソルトを行った。

「んなっ!?!」

尻尾の攻撃を受けたトールはその反動で吹き飛ばされた。

「クツ……んな技あんなかよ……」

トールは毒を回復回復するためにアイテムポーチから解毒薬を取り出そうと動きを止めた。

リオレイア希少種はその隙を逃さず、トールに飛びかかった。

(マズイ……肥やし玉を……)

「トール！鼻を塞いどいて！」

拘束から逃げられないトールの代わりにユーカがリオレイア希少種に向け肥やし玉を投げつけた。

『グオオオオ……』

余りの臭いで拘束を解いてしまったリオレイア希少種の頭にユーカは抜刀斬りを喰らわせた。

「トール！早く解毒を！」

「ああ……」

トールはアイテムポーチから解毒薬を取り出し、それを飲み干すと体から毒が消えるのを感じた。その後、アイテムポーチから回復薬グレートを取り出すとそれも飲み干した。

「今のは助かった……ありがとなユーカ」

「どういたしまして……っとかくるわよ」

肥やし玉をぶつけられ、苛立っているのかりオレイア希少種は距離を詰めるように突進で近付いてきた。

「真っ直ぐ来ると良い標的だぜ？」

トールはそう言うど持っていた閃光玉を投げる。

トールの投げた閃光玉は突進しているリオレイア希少種の目の前で眩い閃光を放った。

『グオオオオツ!?!』

閃光により、視界を奪われたリオレイア希少種はその場に立ち止まると辺りに火炎ブレスを放ち続ける。

しかし、二人はブレスを放ち終えたあとを狙い確実にリオレイア希少種の足に斬撃を与えていく。その痛みに耐えられなくなったのか、リオレイア希少種はバランスを崩しその場に倒れ込む。

トールはリオレイア希少種に鬼刃斬りを喰らわせる。ユーカは肉質が柔らかく、弱点である頭部に溜め斬りを喰らわせていく。

「オラッー！」

トールが二度目の鬼刃大回転斬りを喰らわせた直後、リオレイア希少種は体勢を立て直すと、とても大きな咆哮をあげた。

「こりや夫呼ばれた可能性が高いぞ」

「そうだったら来るまでの間にアイツに深手を与えるしかないでしょー!」

ユーカはそう言い、リオレイア希少種に向かって走っていく。

「やれやれ……なら俺もやるか」

トールはアイテムポーチから落とし穴を取り出すとそれを自分の足元に設置した。落とし穴は地面に置いた瞬間にトラップツールが作動し落とし穴を作り上げた。

「ユーカー! リオレイアをこっちに誘導してくれ!」

「了解!」

トールの指示を受け、ユーカは武器を納めると、リオレイア希少種トールの元に誘導する。

そして……

『グオオオオオッ!』

リオレイア希少種を落とし穴に落とす事に成功した二人は身動きの取れないリオレイア希少種に攻撃を与え続ける。

「ハアッ！」

ユーカの最大まで溜めた強溜め斬りがリオレイア希少種の頭に直撃すると、リオレイア希少種の頭についている鱗が数枚ほど剥がれ落ち、顎下の甲殻が壊れた。

「ユーカー！もう落とし穴が持ちそうにない！少し離れろ！」

トールがそう言った直後、リオレイア希少種は落とし穴から脱出すると、トール達に背を向け足を引きずりながら逃げて行く。

「ユーカー！ペイントボールを！」

「はい……よつと！」

ペイントボールがリオレイア希少種の体にぶつかると強烈な臭いと色がリオレイア希少種に付着した。

二人はその臭いを追いかけて行った。

トールはリオレイア希少種を追いながら考えていた。

（なんでリオレイア希少種は助けに来なかつたんだ？）

トールのその疑問はとあるモンスターとの接触で晴れる事になる。だが最悪の意味

で……



「ハア……ハア……キャラメルは無事に逃げれたかな……」

エリア2の崖から落下したフレイであったが運良く木の枝の上に落ち大ケガを負うまでには至らず、気絶だけで済んでいた。

しかし、落下の際に腰に着けていたアイテムポーチを何処かに無くしていた。

「はあ……地図を無くすなんて……ここがどこのエリアか分からねえよ……」

愚痴を漏らしながらフレイは草木を掻き分けながら進んで行くと広い場所に出た。

「お……広い場所に出たぞ。ここから適当に移動すれ……」

ズシン……ズシン……

地響きが聴こえてくる。

それはどんだんフレイのいるエリアに向かって来ているように大きくなっていく。

「何なんだよ……一体」

フレイが辺りを見回すと大木の近くに一つの黒い影が現れた。

その影は何かをくわえているように見えた。

「ん？良く見えないな……」

そう思いその黒い影を見ていると日の光が枝の隙間なら射し込み、その黒い影の正体が明らかになった。

「な……なんだよ……あのモンスターは!?」

そこにいたのは溪流では今まで確認される事になかった獣竜種……

イビルジョー
恐暴竜であった。

(あんなモンスターがいるだなんて聞いてねえぞ!?)

イビルジョーはくわえていたりオレウス希少種の死体を地面に放り投げるとその死体を喰らい始めた。

そして、リオレウス希少種を食べ終えたイビルジョーは全身の筋肉を隆起させるとフレイが今までに体験したことのないような大きな咆哮をあげた。

その咆哮は脳に響くとも嫌な音である。フレイの体は危険を告げていた。

あのモンスターは危険だ、と。

(……はアイツが消えるまで隠れてないと……)

しかし、フレイがそう考えている内にイビルジョーは何かを察知したように別のエリ

アに向かって走っていった。

(何だったんだ？アイツは……)

溪流の恐暴竜

「なあ……ユーカ」

「どうしたの？ トール？」

リオレイア希少種が移動した直後、トールが深刻な表情でユーカを呼び止めた。

「なんでリオレイア希少種は来なかったんだ？」

「あ……」

「……ユーカ。ここからは俺の憶測だが、この溪流に他にモンスターがいる。それもリオレイアと同等の強さを持っているであろうモンスターだ」

「……」

ユーカはいつも以上に真剣なトールの考えを聴いてなにも返すことが出来なかった。

それはトールの考えが少なからず真実であると思っただけだからである。

「ごめんな、急にこんな話して」

「いいの、トールの言ってる事がもし本当なら……って考えてたの」

「そうか……とにかくリオレイアを追うぞ」

そう言うトールはリオレイア希少種が向かったであろうエリア6に走っていく。

「……わかってるわよ」

トールには聞こえない程小さな声でユーカは呟くとトールの後を追うようにエリア6に走っていった。

◆◆◆◆◆

「もうこのエリアにはいないみたいだな」

二人がエリア6についた時にはリオレイア希少種についたペイントボールの臭いは別のエリアから香っていた。

「どうやらこのエリアの上を通りすぎただけ……みたいだな」

「そうみたいね。この臭いの方向だとエリア8辺りが正解かしら」

「かもしれないな。確かエリア8は飛竜の巣があるからな。行ってみるか」

トールとユーカはエリア8に続く滝の中の洞窟を目指し足を進める。

滝の前に差し掛かった時だった。

(何かの視線を感じる……?)

背後から感じる謎の視線が気になりそれを確認するためにトールは足を止めた。

ユーカはそれを気にせず一人エリア8に入っていく。

ユーカが行った後トールは後ろを振り向くがそこにはなにもいない。

(気のせいかな?)

そう思いながらトールはエリア8に入ってしまった。

◆◆◆◆◆

「どうやら寝てるようだな」

エリア8の巣で寝ているリオレイア希少種を確認したトールは小声でユーカと状況の確認をする。

「……ねえトール、このリオレイアは捕獲しない?」

「なっ!?」

ユーカの一言に驚きトールは大声をあげてしまう。トールは一度咳払いをし、ユーカに問う。

「……どういう事だ?ユーカ?」

「別に深い意味はないけどただ繁殖期のリオレイアを他の場所に連れて行けないか……って考えたの」

「……まったく……わかったよなら捕獲用麻醉玉用意しておいてくれ」

そう言うトールはゆっくりとリオレイア希少種に近付き、寝ているリオレイア希少種の足元にシビレ罟を設置し、シビレ罟に刺激を与え装置を作動させる。

シビレ罟の作動を確認したユーカはリオレイア希少種の元に駆けつける。

『グオアアッ!』

シビレ罨の作動により目を覚ましたりオレイア希少種にユーカは捕獲用麻醉玉を投げつける。

捕獲用麻醉玉を受けたリオレイア希少種は力尽きたようにその場に倒れ込み眠り始めた。

「あとはリオレイアだけだな」

「そうね、無茶言ってごめんねトール」

「良いつてことだ、さっさと終わらせてフレイさんを探しに行くぞ」

トールはそう言い、ふとエリア6に続く道を見た。

「な……」

「トール、何かいるの?」

トールのその声に反応しユーカも同じ場所を見る。

「嘘……でしょ……」

二人の視線の先にいたのは恐暴竜イビルジョーであった。

◆◆◆◆◆

(なんで溪流にイビルジョーがいるんだ!?)

俺は横にいるユーカが気になりユーカの様子を確認した。

「あ……あ……」

「ユーカ？どうした？」

ユーカの様子がおかしい。指先は震え、顔は青ざめている。

「ユーカ！しっかりしろ！」

俺の声が聞こえていないのかユーカから反応はない。

非常に不味い。このままでは全滅してしまう。そう思った俺はアイテムポーチから閃光玉を取りだしイビルジョーの顔目掛けて投げつけた。

投げつけた閃光玉はイビルジョーの眼前で眩い閃光を放つとイビルジョーの視界を奪った。

「ユーカ！しっかりしろ！今のうちに逃げるぞ！」

ユーカの肩を揺さぶるがやはりユーカから反応はない。

「ああ！もう罅が明かねえ！」

俺はユーカを抱えあげるとエリア9を目指し駆け出した。

エリア9についた俺はユーカを降ろすと、もう一度ユーカに声をかけたが、返事はなくユーカはずっと放心状態のままだった。

「ユーカ！いい加減目を覚ませ！」

俺はユーカにそう言うのとユーカの頬を平手で叩いた。

その一撃で正気に戻ったのかユーカは涙目で俺を睨んできた。

「な、なんで叩かれないといけないのよ！」

「はあ……やつと正気に戻ったか」

「まるで私がさつきまで正気じゃなかったみたいない言い方じゃない」

……まさか気付いてないのか？これは説明しないと面倒になりそうだな……

「さつきエリア8にいたイビルジョーを見た後から放心状態になってたんだぞ？」

「あ……」

「だから俺がここまでユーカを抱えて来たんだぞ？感謝しろよ？」

「……え？ツールが私を抱えて来た？」

「ん？そうだけ……『パアン！』痛っ！なんで叩くんだよ！」

ユーカは顔を赤く染めながら答えた。

「う……うるさい！ツールが反省しろ！」

「えー……」

それから数分間俺とユーカの口喧嘩は続いた。まあ、一方的だったけど。

「で、ユーカ。イビルジョーだけど……」

「ごめん、トール私は戦えない……」

俺の問いにユーカは俯きながら答えた。

「まあ予想してたけどな……ならユーカはフレイさんを探してくれるか？」

「トールはどうするの？まさか一人でイビルジョーと戦うって言うの？」

「その通りだ」

「リオレウスもいるかも知れないのに一人で戦うの!？」

「……なあユーカ、リオレイアと戦っているときにリオレウスが来なかっただろ？」

「確かに来なかったけど……」

「イビルジョーの存在でわかった。リオレウスはもう倒されている。イビルジョーにな
とにかくかだ、ユーカはフレイさんを頼む。フレイさんを見つけたら俺には構わず一

度村に帰ってくれ」

「でも!」

「頼む」

「……わかったわよ……」

確かに俺の頼みは無理があるかも知れない。なんせあのイビルジョーを一人で相手にするのだ。心配されて当然だ。

「ねえ……トール」

「ん？ どうした？」

「これ」

そう言うとユーカは俺に落とし穴とシビレ罠を渡してきた。

「これいいのか？」

「イビルジョーと戦うのに罠がなかったら致命的でしょ？」

「……ありがとよ、ユーカ」

「ただし、絶対に倒しなさいよ？」

「わかってる」

「じゃあ頑張つてね？」

ユーカはそう言うとエリア3に続く橋を渡っていった。

ユーカが橋を渡り終えるのを確認するとポーチから砥石を取り出し王ケ刀【伏雷】の刃を研いでいく。

俺は刃を研ぎ終え、王ケ刀【伏雷】を鞘に戻しエリア8に向かっていった。

「さて……一狩り行こうか」

ユーカの決別

トールはユーカと別れたあとエリア8に向かうとイビルジョーは捕獲され身動きの出来ないリオレイア希少種を喰らっていた。

「……やっぱり喰ってるか……」

トールは足元に落ちている石ころを拾うと狙いを定めイビルジョー目掛けて投げつける。

『グオ?』

石ころを当てられた事でトールの存在に気付いたイビルジョーはその場で咆哮をする。

「つたく……煩いな……」

トールはそう言うのと閃光玉を投げつけた。

(残りの閃光玉は2つ……まあ問題はないな)

アイテムポーチを確認したトールは王牙刀を構え視界を奪われたイビルジョーの脚を斬りつける。

「ハアッ!」

二撃……三撃………順調に攻撃を与えていたトールだったが受け続けるままのイビルジョーではなくその場で右脚をあげると地面を叩きつけた。

「クツ……」

地面を叩きつけた衝撃により周囲が揺れトールの攻撃が止まった。

トールの攻撃が止まった事に気付いたのか、イビルジョーはもう一度脚で地面を叩きつける。

「うおっ!？」

先程の揺れから立ち直ったトールは二度目の叩きつけは横にずれることで回避した。

叩きつけの直後閃光玉で奪われていた視界が戻ったイビルジョーは全身の筋肉を隆起させるとその場で咆哮をあげた。

『グオオオオオオッ』

◆◆◆◆◆

怒り状態になったイビルジョーはトールの方を向くと龍属性ブレスを放つ。

しかし、ブレスが放たれる前兆を読み取ったトールはイビルジョーの懐に潜り込むと足元に落とし穴を設置する。

(ユーカー、落とし穴使わせて貰うぞ)

足元に設置された落とし穴にイビルジョーは落下し身動きが取れなくなる。

「ハアッ！」

トールは溜まっていた練気を解放しイビルジョーの頭部に鬼刃斬りを与え続ける。

鬼刃斬りによる斬撃でイビルジョーからは鮮血が飛び散る。そして斬撃を与え続けたイビルジョーの頭部には額から顎にかけて王牙刀による切り傷が見られる。

「そろそろ落とし穴の限界か……」

トールはそう呟くとイビルジョーから少し距離をとると閃光玉を取り出す。トールが閃光玉を取り出すのとタイミングでイビルジョーは落とし穴から脱け出した。

脱け出すことに力を使ったのかイビルジョーは口からよだれを垂らしながらその場で威嚇をしている。

「お疲れか？ならこれでも……くらえ！」

トールはイビルジョーに向け再び閃光玉を投げつける。

(あと一つの閃光玉はピンチの時の為に残しておくか)

眩い閃光で視界を奪われたイビルジョーの脚に再び斬撃を与え続けるトール。

そして脚にたまったダメージによりイビルジョーはその場に倒れこむ。

(ここで倒すのは不可能だろう……なら深手を与えるまでだ！)

トールはそう考えながらイビルジョーを斬り続ける。

イビルジョーに数回攻撃を与えているとイビルジョーは立ち上がり、エリア6に向かって走っていく。

それを追うようにトールもエリア6に向かっていった。

◆◆◆◆◆

トールと別れたユーカはフレイを探すためにエリア2に戻ってきていた。

「……もしかしたらエリア5に……」

いるかもしれない、とユーカは思った。

ジンオウガというモンスターがいるが、そのモンスターはこのエリア2の崖からエリア5まで跳躍し移動する。簡単に言うところのエリアからエリアにはマップには書かれていないが繋がっていると伝えるのである。無理矢理な考えではあるが、エリア2から落ちたのならその可能性は0ではない。

「よし！ エリア5に行ってみよう！」

ユーカはそう言うのとエリア5に向かって行った。

エリア5に着いたユーカはまず、エリア2に近い草むらを搜索し始める。

「フレイサーんいたら返事してください」

だが返事はない。

「……もしかしたらここじゃないのかな？」

その時だった——

『ガサッ』

近くの草むらで何かが動く音がした。

「!! フレイサーん!?!」

音のした方に行ってみるとそこには……

オルタロスがいた。

「なんでオルタロスなのよ!!」

ユーカの声がエリア5に木霊する。

「だ……誰かいるのか？」

ユーカの背後から声がある。それも男性の声だ。

ユーカは振り替えるとそこには骸骨デスのような外見ギアの装備リを着たハンターがいた。

「ひっ！」

その姿に驚き悲鳴をあげるユーカ。

「あ……すみません」

と、男性は言うのと頭に着けている防具を外すと、赤い髪があらわになった。

「えっと……その……どうもフレイと申します」

「え……貴方がフレイさん？」

「ん？そうだけど……」

「よかったあ……」

ユーカから安堵の声が漏れる。

「さあ、フレイさん キヤラメルさんが心配しますからククモ村に帰りましょう」

「ああ……だが一つ聞かせて欲しい。この溪流にいた黒い竜は一体なんだい？」

「それは……イビルジョーです」

「イビル……ジョー？」

ソイツは今どうしてるんだい？」

「……今はツールというハンターが一人で戦ってます」

ユーカは俯きながら答える。

「……………そうか」

そう言うのとフレイは持っていたデスギアゲヒルを被る。

「なあ君の名前は何て言うんだ？」

「ユーカですけど……………」

「そうか、ユーカ」

君の武器を貸して欲しい」

「え……………」

フレイの口から発せられた言葉は驚きのものであった。

「ど……………どういう事ですか!？」

「君が戦わないなら代わりに僕が戦うという事だ」

「さあ、君の武器を貸してくれないか？」

「っ……………」

確かに私はイビルジョーと戦おうと思うと足が竦んで何も出来なくなる。今回の狩りもまさにその通りである。だからといって自分の魂である武器を他人に渡し代わりに戦ってもらうなどもつての他である。

ここで乗り越えなければ私は一生イビルジョーと戦う事が出来ない。

「それは……出来ません」

私はここで過去と決別しないといけない。

「フツ……それでこそハンターだ

……とところで地図持ってないか？」

「は……はあ……」

◆◆◆◆◆

エリア6に向かつていったイビルジョーを追いエリア6に入ったツールだったが待ち伏せしていたようにイビルジョーがツールに飛び掛かった。

「うわっ!？」

イビルジョーの拘束攻撃を受けたツールは身動きが取れず足掻こうにしても手足を圧迫され何も出来ない。

さらにイビルジョーの唾液により防具は腐食し確実に体力を奪われていく。
(肥やし玉なんて持ってきてねーんだよ！クソッ！)

抵抗のしようのないツールが諦めかけた時何かがイビルジョーに直撃した。

『グオオ!!』

鼻を塞ぎなくなるような悪臭……それは肥やし玉だった。

突然ぶつけられた肥やし玉によりイビルジョーは拘束を解く。肥やし玉が飛んでき

た方を見るとそこにはユーカの姿があつた。

「トール……一体何やってるのよ」

「なツ!? ユーカお前こそなんでここに!」

「……ただ昔の私と決別しにきただけよ

さあ、トール。さっさとアイツを倒すわよ」

「——ああ!」

異変の終結

まさかユーカが来るなんて——トールはユーカに助けられた際にそう思った。

彼女は昔まだ上位に上がりたての頃クエストに乱入してきたイビルジョーに襲われ、重症を負った。その時の俺は採取ツアーに行っており村に帰ってきてからユーカがイビルジョーに襲われた事を知った。

それ以来ユーカはイビルジョーに対して恐怖を抱くようになった。

だが、そのユーカが自分から過去と決別するためにイビルジョーと戦うのだ。

「ユーカ！　今の奴は空腹で動きが鈍い！　今のうちにいくぞー！」

「つたく……わかってるわよー！」

ユーカはそう言いイビルジョーに走って近付き、抜刀斬りを喰らわせる。

その一撃でイビルジョーはユーカを攻撃の標的にするが、それを読んでいたかのようにトールは最後の閃光玉を投げつける。

「これが最後の閃光玉だっ！」

視界を奪われたイビルジョーに二人は攻撃を与えていく。

(三度目の閃光玉だ……効果は長くはないな……)

トールの思惑通り、イビルジョーの視界はすぐ回復した。

「チツ……視力は回復したが構わずいくぞ！」

トールは再びイビルジョーに攻撃を与える。だが、イビルジョーも受け続けるだけではなく、体を旋回させ、尻尾で辺りを薙ぎ払うように攻撃を行った。

「おっとー！」

トールはイビルジョーの足元に潜り込む事で回避し、ユーカは大剣でその攻撃を防いだ。

二人に痛手を与えられなかったイビルジョーはエリア5に脚を引きずり逃げていく。

「ユーカ、もう奴の体力も少しのハズだ。罾を仕掛けてそれで仕留めるぞ！」

「分かったわ」

ユーカはそう言うのと早足でイビルジョーを追いかけようとするが、トールはそのユーカの肩を掴みユーカの進行を止めた。

「ちよつと！ トール、なんで止めるわけ!？」

「あのイビルジョーが完全に寝るまで待つんだ。奴が寝たのを確認したら最大威力の溜め斬りを頭に喰らわせるんだ」

「ちよつと納得できないけどツールに従うわ」

そしてイビルジョーがエリア5に向かってから1、2分が経った時、ツールが

「よし、行くぞ」

と言うと二人はエリア5に向かっていった。

◆◆◆◆◆

「……どうやら寝ているようだな」

「……らしいわね」

二人はエリア5の中心にある切り株の前で眠っているイビルジョーを起こさないように近付き、ユーカはイビルジョーの顔の前で大剣を溜め始め、ツールはイビルジョーの近くにシビレ罠を仕掛ける。

二人は互いに顔を見合せ確認するとユーカがイビルジョーに向け最大威力の溜め斬りを喰らわせる。

『グオオオッ!』

溜め斬りによつて起こされたイビルジョーは数歩後退する。そして――

「当たりだ」

ツールが仕掛けていたシビレ罠に見事引っ掛かった。

「行つけえええ!!」

そして二人はイビルジョーにどんどん攻撃を喰らわせていく。

トールの王牙刀は肉を断ちその雷により肉を焦がしていく。

ユーカの暴砂剣は属性は無いにせよその鋭利な刃でイビルジョーの肉を削いでいく。

そして――

ズドオオオン……

大きな音をたて、イビルジョーの巨体が地面に倒れ、そして動かなくなった。

「やっと……終わったな……」

「そうね……」

そして二人は一度ベースキャンプに戻ると、ベットで寝ていたフレイを起こし、待機させていたガーグア荷車でユクモ村に帰っていった。

◆◆◆◆◆

「ふむ……溪流にイビルジョー……か」

二人は溪流で起きた事を全てギルドマスターに報告し、溪流に置いてあるイビル

ジョーの死体を回収するため村の男達が向かっていった。勿論、対象を狩猟して溪流が安全になったとは限らないので二人も護衛兼回収として行くことになった。

回収を終え再び村に帰ってきた二人は温泉に浸かりながら溪流での出来事を語っていた。

「ねえトール」

ふとユーカが眩く。

「私って成長出来たのかな……」

ユーカは浴場の天井を見ながら眩いた。

「んあ？あぁ、少なくとも成長出来たと思うぞ？」

トールはユーカの問いに笑顔で返す。

「フフツ……ありがと、トール」

「お互いs……」

——お互い様、トールがそう言おうとした瞬間温泉に水飛沫が舞った。

その正体は……

「いやあ、最高だな。キャラメル！」

「ハイ！最高ですニヤァ！」

フレイとオトモのキャラメルであった。

その一人と一匹は互いに笑いあっているのだがその一人に近付く二つの影があった。

「フレイさん……?」

トールとユーカーの声色に怒りが混ざっている。

「お、トールにユーカーじゃないか！君たちも温泉に入っていたのか！　　この温泉は

本当に素晴らしい……な？」

フレイは二人が手に持つものを見ると対応に困ったような表情をした。

「なあ、君たち。その手に持っているものはなんだい？」

二人が持っていたもの……それはガーグアのおもちやであった。そして二人は深呼吸をすると大きな声で

「温泉で遊ぶな!!」

と叫びフレイに向けガーグアのおもちやをフレイ目掛けて投げつけたのであった。

番外編：孤島の海で……

——これはとある夏のユクモ村のハンターたちの日常譚。

「なあ、ユーカ。久しぶりに海に行ってみないか？」

急に私の家にやって来たトールは顔を見るなりそう言い出した。

「海？どうしてそうなるのよ？確かに最近暑いから行きたいって気持ちはあるけど……」

「なら決定だな」

「え!？」

いやいや、急に言い出して急にメンバーに加えられても困るだけなんですけど……

「二日後に孤島に向けて出発だからな？しっかりと準備しておけよ？」

そう言つてトールは自分の家のある闘技場に走つていつてしまった。

「はあ……準備しておきましょう……」

トールの姿が見えなくなるのを確認した私は家の物置に向かい、アイテムボックスの中から大きめの革袋を引っ張り出し、必要な物を詰めていく。

——そんなとき、二年前の水着が荷物陰から顔を覗かせた。

「うわあ……流石に二年前の水着ってサイズが合うわけないわよね……」

私は はあ、とため息をつき、とあるお店を目指して家を出ることにした。

◇◆◇

目的のお店、と言うのはいつも防具等でお世話になってる龍人族のおじいさんが経営しているお店のことだ。

そのお店でおじいさんのお手伝いをしている女性——レイさん——に用があるのだ。

「失礼しまーす……」

と、入店すると

「はい、いらつしやませー」と女性の声が店の奥から聞こえてくる。

「あら、ユーカちゃん。今日はどうしたの？」

「その……レイさん……実はかくかくしかじか……」

≡≡≡

「ふうーん……海ねえ……そのために水着を新調しに来たわけねえ」

レイさんはそう言った後、よし！、と言うと私の腕を引っ張って私を店の奥に連れていった。

何をされるかはもう予想がついているので驚かないけどレイさんの私の腕を掴む握力の強さには驚かされる。あー……やつぱり慣れないなあ……

「さて、ユーカちゃん。身体のサイズを測るからいつも通り頼むわよ？」

「……はあい」

そう言い私は上の服を脱ぎ、近くの机の上に置いた。

——正直な話、サイズを測るのにそんなに時間はかからなかった。ただ問題は……と言おうとレイさんが……ああ思い出すだけで恥ずかしい……

「じゃあ、ユーカちゃん。明日までには完成させておくから海に行く前に寄ってね」

「ありがとうございます」

レイさんにお礼の挨拶をし、私は店を後にした。

≡≡≡

さて、約束の二日後になったのでお店に寄り、新しい水着を受け取ってからトールの家に向かう。

トールの家の近くに着くと、見覚えのある数名がそこにいた。

トール、トールのお母さん、フレイさんにキヤラメル……何故かレイさんもいた。

何故いるのですか？と聞くと、

「面白そうじゃない」

と返ってきた。

もう良いや……そう思うことしか出来なかった。

どうこうしている間に、トールのお父さんがガーグアを三匹連れてきた。トールのお父さんは連れてきたガーグアに荷車を付けると、

「さあ、皆乗った乗った。出発するぞ」

と、大声で話し皆が三台ある荷車に乗ったのを確認すると海に出発していった。



「さあ！皆、今日はこの孤島の海を独り占めだ！いや、皆でいるか独り占めじゃないのか？うーむ……」

と、トールのお父さんが唸っているけど皆そんなこと無視して海で遊んでいる。

しかし、不思議なものね……エリア10にくるまで一度もモンスターに会わないだなんて。ま、平和なことの良いことよ。さ、泳ぎに行こつと。

「おーい！ユーカ。俺とフレイさんが泳ぎで競走するからどつちが早いか見ててくれな
いか？」

と、トールに競走の審判を頼まれた。泳ぎたいのに……

「わかったわよ……」

「おうーじゃあ頼むぞー！」

そう言つてトールは海に飛び込む。トールとフレイさんは海岸からある程度進んだ位置で動きを止める。

どうやら準備が出来たようだ。

「いちについて——スタート！」

かけ声とともに二人が泳ぎ始める。あ、フレイさん泳ぐの速いんだ。へえー。あ、トールがフレイさんを抜かした。意外に接戦なのね。と言うかゴールつてどこ？ 聞いてなかったわ。

ふと、視界を上の方に向ける。

あれ？ キャラメルだ。あそこから飛び込むのかな？ あ、飛び込んだ。あつ！ そのままいくと……

バツシャーン！

泳いでいたフレイさんとキャラメルがぶつかった。そしてそのまま沈んでいく一人と一匹……

救助はトールに任せて……これでやつと泳げる！

ドッボン！

海に飛び込むと水しぶきが上がり、右足の自由が利かなくなった。あれ？ まさか足

吊った？え？嘘……泳げ……な……



『……カ！……り……ろ！……カ！……っかりしろ！ユーカ！』

トールの声で目が覚めた。

私が目を覚ましたことを確認したトールは よかった、と一言呟いてから私が溺れてからのことを教えてくれた。

どうやら私が溺れたことにより、皆遊ぶどころではなくなっただけ。大変迷惑をお掛けしました。それと、この海に来たときはまだ昼位だったけ？今は太陽が沈みかけている。長い間気を失ってたのかな？と聞くと そんなことはない とトール。あれから一時間位しか経っていないらしい。

さて、そんなことより現状の整理から。トールに助けられた？そうだったらトールも大変だったと思う。だってフレイさんとキャラメルを救助してから……ねえ？そして、私は助けられて気を失ってたから応急処置をトールがした……と。

ん？応急処置って人工呼吸と……人工呼吸ツ！?

体温が一気に上昇していく。ああ……恥ずかしい……まともにトールの顔が見れない……

≡≡≡≡

二人の様子を遠くからみていたトールのお父さんとお母さん、そしてレイさんは

「ねえあなた。青春ねえ」

「ん？そうだな。青春だな」

「あれが青春って奴なのねえ……」

と、順番に呟いて酒を飲むのであった。

≡≡≡≡

あれから色々あつて今は夜。

そして誰が言い出したかわからないけど肝試しをする事になった。しかも、二人一組で行う事になったらしく、私とトール、トールのお父さんお母さん、フレイさんとキャラメル、レイさんは一人らしい。

肝試しの内容は今いるエリア10からエリア8まで行ってくる、という事らしい。ただし、崖から行くのはダメとのこと。しっかりと歩いてエリア8を目指せ、と言うことだと思う。因みに、帰りは飛び降りてOKらしい。

さて、私たちの番が回ってきたらしい。トールが妙に張り切っている。

「はあ……」

「ん？ユーカなんかあつたか？」

「へっ……!? いや、何も無いわよ?」

「ふーん……なら行こうぜ!」

そう言う事で私とトールの肝試しが始まったのであった。

≡≡≡

さあ、困ったことになった。まさかトールと離れてしまった。いや、正確にはトールが勝手に行ってしまっただけなのだけれど……ま、迷子じゃないんだからね!?

と言うか辺りが暗すぎてここがどこのエリアかわからない。えーつとエリア6? でトールが先に行ってしまうからトールを追うように走っていたらよくわからない洞窟っぽいところに着いてしまった。

「……暗すぎる」

基本、孤島の夜は月明かりがあつて明るい。だがここは洞窟内部。月明かりが入ってくるはずがない。

しばらくの間、この洞窟にいるので少しは慣れているが暗いのは変わらない。

「ハア……」

と、ため息を吐いた時だった。洞窟内に

カッーン……カッーン……

と、ピツケルで鉱石を採取をする音が響いた。
私は恐怖を感じながらも、好奇心には勝てず音のする方に歩いていった。

音のする方に近づいていくと、採取を終えたのか、ピツケルの音は聞こえなくなっていた。

と、思っていたとき前方に人の気配を感じた。

「誰？」

そう言い前方を向く。

その人はツールではなかった。

その人の口は耳まで裂けており、その裂けた口と目は赤く光っている。

「キヤアアアアアア!!」

洞窟内に私の叫び声が木霊する。私は叫びながら逃げた。壁沿いに移動し、洞窟内からも脱出することも出来た。だがそれでも私は走るのを止めなかった。エリア10まで走り続けた。きっと今ならディアブロスの突進と並走出来るんじゃないのかな？なんて思いながら……

≡≡≡

エリア10に着いた私は皆に体験したことを全て話した。だが、誰も信じてくれな

かった。

「きつと疲れてたのよ」とか色々言われたけどあれは絶対に何かいたのだと思う。

「おーい！ユーカー！花火するぞ！」

トールが手を振りながら私を呼ぶ。しょうがない、いつまでも考え続けるのは良くないよね。さ、花火を楽しもう！

≡≡≡

その頃エリア4の洞窟内にて口が裂けているような見た目の防具——マギユルシリーズ——を身に纏ったハンター・シマは

「そんなに驚かなくてもいいのに……」

と、悲しげに呟くのであった。

番外編：ツールと変人と弓使い

「はあー……やっぱり温泉は素晴らしいなあ」

皆で孤島に遊びに行つてから数日が経過しており、俺——ツール——はいつものように浴場の温泉に浸かっていた。

「だね。こここの温泉は最高だよ」

と、俺の後ろの方から声がしたので振り向くとそこにはマグユルの頭装備だけ被った男性がいた。

「んにやつ!?!」

急すぎて変な声が出てしまった……いや、なんで頭装備だけしているんですか……ここは注意した方がいいかもしれないな。

「あ、あのこの浴場は装備着けたままの入浴は禁止してますよ?」

「ん? ああ、これのことかい? 実は私は素顔を見られるのがあまり好きではなくてね」
そう言いマグユルの男性は浴場を後にしていった。

「……俺の事言えないけどあの人変な人だったなあ……」

三三三三

マギユルの男性が浴場を去ってから数分後、黒い髪をマゲの様に結った男性が入ってきた。年齢は俺の父さんと同じ位だろう。

ただ、右腕にあるモンスターに付けられたであろう傷痕が物凄く痛々しい。

俺がその傷痕を見つめていたとき、その男性と目が合ってしまった。

「フフ……この傷痕が気になるかい？この傷は仲間を庇って受けた傷でな？大したことはないさ」

「そうなんですか」

この人は仲間を助けるために傷を負ったのか……自分より仲間を大切に思っている証拠だな。そう思っているとき、

「君は見たところハンターのようだね」

と、男性が話しかけてきた。

「あ、はい。この村のハンターのトールって言います」

「ふむ、トール君か。ご親切に自己紹介までしてくれて有難う。私はムファイファイと言う。これも何かの縁だな、よろしく」

そう言いムファイファイさんは俺に右手を突き出してきた。その意味を理解し俺も右手を出し、握手を交わす。

「なあ、トール君。出会って早々こんな頼み事をするのは少々無神経だがドボルベルクと言うモンスターを狩るのを手伝ってくれないか？」



ムファイフイさんから頼まれたのはドボルベルクの狩猟の手伝いだった。俺は二つ返事で了承し、一度自宅に帰り防具の準備をしていた。

「ドボルベルクかあ……一度溪流の木を尻尾で無差別に殴り倒しているのを狩猟して以来だな」

そう思いながら準備を終えた俺は壁に立て掛けてある飛竜刀【銀】を持ち集会浴場に向かっていった。



集会浴場に着くとムファイフイさんがあのマギユルの男性と会話をしているところだった。マギユルの男性はよくみると夜天連刃【黒翼】を背負っており、ムファイフイさんはあの古龍ジエンモーランの防具を身に纏っており、武器は鹿角ノ剛弾弓である。

「来たね、トール君。彼に話をしたところ彼も手伝ってくれることになってね」

「どうも……つと君は先程浴場でお会いしたね

そう言えば自己紹介がまだだったね。私の名前はシマ、と言う。気兼ねなく『シマさ

ん」と呼んでくれればいいよ」

「よろしくお願いいたします。シマさん」

「お二人とも挨拶は済んだかい？ そうだ、二人にはこれを渡しておこう。私のギルドカードだ」

そう言ったムファイフイさんは俺たちにギルドカードを渡してきた。

「あ、ありがとうございます！」

「ムファイフイさん感謝します」

「さ、出発しようか」



溪流に着いてからはドボルベルクに経験のないムファイフイさんは援護に回ってもらい、俺とシマさんでドボルベルクを攻撃するという事になった。

「トール君、君はその場でハンターを見極める素質があるようだね。昔の仲間を思い出すよ」

「仲間……ですか？ 一体どんな人だったんですか？」

「そうだね……君のように状況でそのハンターの得意不得意を見極め指令を与える事ができるハンターだったね。今はどうしてるかわからないけどね」

「へえ……そんな人みたいだなんてちよつと照れますね」

ムファイフィさんに誉められると何だか妙に懐かしい気分になった。——まるで父さんに誉められているようなそんな感じがした。

「おーい！二人とも置いていきますよ？」

「ああ、悪いねシマ君。さ、ツール君シマ君を待たせるのはあまり良くないから行くぞ」「はい！」

≡≡≡≡≡

「やはりエリア5にいましたね。お二人さん、ここは少し私に任せてくれませんか？」

「ふむ、ならシマ君に任せよう。いいかな？ツール君」

「え……あつ はい。罨師のスキルがあるので良いかと思えます」

「それでは任せてくれ」

そう言うとシマさんはアイテムポーチから落とし穴を取りだし、ドボルベルクにバレンないように近付き、足元に落とし穴を設置し、こちらに合図を送ってきた。その合図を受け、ムファイフィさんがドボルベルクに向け剛弾弓の鉄球を放つ。

「よし、これでアイツがこちらに気が付きましたよ。ではムファイフィさんは作戦通り援護を頼みます」

「ああ、わかったよ」

こちらに気付いたドボルベルクが一步動いた瞬間、シマさんが設置した落とし穴に落下する。

「さあ、本気を出させて頂きますよ」

シマさんはそう言うのと夜天連刃を構え、乱舞による連撃でドボルベルクのコブ近くの部位に斬撃を与え続けている。

「ハアッ！」

俺は鬼刃斬りでドボルベルクの側面を攻め続ける。

——とそんな時

『ヒュンッ！』

俺の顔の近くを剛弾弓の鉄球が通過していった。

ムフィイイさんの方に目をやると、ムフィイイさんが右腕に抑え踞っている。

「!? ムフィイイさん！」

俺は武器を納めるとムフィイイさんの元に駆け出した。

「ムフィイイさん！ 大丈夫ですか!？」

「ツ……すまないねトール君。私は君に嘘を吐いていた」

「嘘……ですか」

「ああ、君に腕の傷を説明したとき大したことない、と言ったね。実はあの傷を負ってか

ら手の痙攣が止まらなくてね……」

ムファイフイさんから告げられた言葉を聞いて俺は驚きが隠せなかった。

「はは……驚いてるね。この腕の痙攣が出てから私は仲間を傷つけたくないがために一度ハンターを辞めようとまで思ってたよ」

ムファイフイさんは震える腕を抑えながら話を続ける。

「でも、かつての仲間達はこんな俺でも必要としてくれた。だから俺はハンターとしてやっていくことが出来たのさ。」

……まあ、そのパーティーも数年前に解散したけどね。君をこの狩りに誘ったのは私のハンターとしての最期の狩りにしたかったからさ」

「そうだったんですか……」

「君には悪いことをしたね。すまなかった。さあ、腕の震えも治まったようだ。狩りを続けよう」

「無理はしないでくださいよ？何かあったら近くのエリアやモドリ玉で逃げてくださ
い」

「ああ、了解だ」

ムファイフイさんが再び剛弾弓を構えるのを確認した俺は一人で戦っているだろうシマさんの方に向かっていった。

三三三三

ムファイイさんに異変が起きてから数十分程経った。あれからムファイイさんは自分の異変に気付くと隣のエリアに退避したり等、俺の指事通り行動してくれた。

シマさんはドボルベルクが怒ったり、危険な行動を始めると誰よりも早くモドリ玉を取りだしベースキャンプに帰っていくが戻ってから数分もたたない内にそのエリアに帰ってくる。

本人曰く、「ヒットアンドアウェイだ」らしい。回避すれば良いものを何故モドリ玉で戻るかはおわからない。やはり変な人だなと思うが、双剣の使い方はとても上手である。後で教えて貰おうかな。

「トール君！ ドボルベルクが足を引きずっているぞ、捕獲するか？」

「はい、捕獲しましょう！ シマさん罠の設置頼めますか？」

「大丈夫だ。問題ない（キリッ）」

「了解しました、お願いします」

「ああ、私に任せてくれ！」

シマさんは自慢の脚力でドボルベルクと距離を詰めるとドボルベルクが通過するであろう足場にシビレ罠を設置し、見事ドボルベルクが罠に引っ掛かり、そのドボルベルク目掛けて捕獲用麻醉玉を投げつけていく。

二発目がドボルベルクの顔に当たった瞬間　ドボルベルクはその場に崩れるように倒れ、眠り始めた。

「終わり……ましたね」

「ああ、悔いはないな。ありがとう」

「え？」

ムファイフイさんがいた場所を見るがそこにはムファイフイさんの姿はない。

「ムファイフイさん？」

その問いに答える者はおらず、溪流にはシマさんの喜びの叫びが木霊するだけだった。



「——って事があったんだよ」

「ふーん、ツール暑さでどうかしてたんじゃないの？」

「いや、そんな事はないと思うんだけどな……」

確かに俺はあるときムファイフイさん達と狩りに行った筈なんだよな……：……：……だけどクエストが終わった後、受付嬢に聞いてもクエストは俺とシマさんの二人が受けた、って言ってたし一体どうなってるんだ？

「おう、ツール。どうした？　そんな深刻な顔して」

「あ、父さん。ねえ父さんはムファイファイさんって知ってる？」

俺がそう問うと父さんは目を丸くしたような表情をし、

「知ってるも何もムファイファイは俺がポケケ村のハンターだった頃の狩り仲間だ。だがツール、どうして急にムファイファイのことを？」

「それはムファイファイさんと狩りに行ったからだよ。俺は確かにムファイファイさん達と狩りに行った筈なのに誰も信じてくれないんだよ。ギルドカードだつて貰ったのに……ほら」

俺がムファイファイさんのギルドカードを見せると父さんは驚いたような表情に変わった。

「……なあツール。落ち着いて聞いてくれ。ムファイファイはもう生きてない筈なんだ。ムファイファイはある狩りの途中、仲間を庇い命を落としたんだ」

「え？でもムファイファイさんは仲間を庇って傷を負ったつて……」

「ああ、確かにその通りだ。ムファイファイは傷を負ったさ。だが命を落としたのはその狩りじゃない。その狩りのもつと後の狩りだよ」

「じゃあ俺が出会ったムファイファイさんは一体……」

「もしかして幽霊だったのかもな。なあツール、このギルドカードちよつと確認したいことがあるから少しの間借りるぞ」

「あ、うん。わかったよ」

父さんは俺の手からギルドカードを取ると、何処かに行ってしまった。

「幽霊……だったのかな……」

≡≡≡

トールからムファイフィのギルドカードを借りた父親——オールド——はムファイフィのギルドカードを眺めながら昔を思い出すように呟いた。

「お前が亡くなってから20年経つのか……お前は最高の仲間だったよ。どんなときも自分より仲間優先だよ……」

お前が死んだときは信じられなかったよ……

お前は最期まで仲間がいるから……なんて言ってたよな

仲間がいるから……か」

——オールドがその言葉を呟くと彼の目から一筋の涙がこぼれていったのであった。

ある意味平和なユクモ村

「あー……最近は平和だなあ……」

「そうねえ……何もないわね……」

相変わらず温泉に浸かるしかない平和なユクモ村でツールとユーカはやはり温泉に浸かっていた。

「最近キノコ採取にハチミツ集め、龍の卵運び……本当に平和だよなあ」

トールの言う通り、最近の依頼は平和な依頼ばかりである。それもそのはず、ツールとユーカが倒したイビルジョーが溪流の生態系を壊滅に追い込んだため、生態系の復活まではしばらく狩りは行えないらしい。そのため、村での主な依頼は採取等になってしまっているのだ。

「はあ……」

二人に今できることは大きなため息を吐くことだけだった。

≡≡≡≡

「あー……平和だなあ……」

「ねえツール。その言葉昨日も聞いたわよ？もういい加減慣れなさいよ」

「えー……だつてよー」

「はいはい、言い訳しないの」

「聞いたのはユーカじゃん……」

また昨日と同じく、温泉に浸かっていた二人は温泉から上がると、着替えると浴場を後にした。



「あー！ユーカおねえちゃん！」

村に出ると一人の少女がユーカに近寄ってきた。その少女は何かを抱えている様子である。

「どうしたの？」

「あのね！ユーカおねえちゃん！さつきガーグアの卵から赤ちゃんが生まれたんだよ！ほらー！」

少女はそう言うのと抱えていたガーグアの幼体を前につき出すようにユーカに見せる。

「わあ！ほんとだ！可愛いわね」

「うん！わたし、がんばってそだてるね！」

「うん、えらいえらい」

そう言つて少女の頭を撫でるユーカ。

「えへへ……」

ユーカに頭を撫でられ笑顔の少女が顔を上げるとトールと目があった。

「トールおにいちちゃんも頭なでなでしてほしいの？」

「んなつ!!? そんなわけないぞ?!」

「ユーカおねえちゃんが言つてたよ! 『自分には正直に』つて!」

「いや、俺が頭撫でてほしいなんて思うわけないだろ? なあ? ユーカ?」

「へえ、トールも頭撫でて欲しかったんだ」

そう言い、トールの頭を撫で始めるユーカの手をはらおうとするトールだったが……

「ばっ……ちよつやめろ! やめ……てください……」

「トールおにいちちゃん頭撫でられてニコニコしてる!」

結局、撫でて欲しかったトールであった。

≡≡≡≡

「……暇ね」

「どうした? ユーカお前らしくないぞ」

昨日まで暇と言つていたトールと代わり、今日はユーカが前日までのトールの様な状態になっていた。

「なんであんたは元気なのよ……昨日まで暇とか言ってたじゃない……」

「確かに暇だったけどさ、今日父さんから里帰りしないか？って言われたから今日の夜からポツケ村に行くことにしたんだ」

「へえ……里帰りか。私の生まれ育つたのはこのユクモ村だし他の村には行ったことないのよね……」

「ねえ、ツール。私もポツケ村に着いていってもいい？」

「別に問題ないぞ……急に元気になったな？」

「出発は今日の夜だからな？しつかりと準備してこいよ」

「それじゃあ準備の為に今日は先に失礼するわ」

「ユーカはそう言うのと自宅に向かって行った。」

「おう……って保温性の高い防具を……って聞こえるわけないよな……」

「ま、いいかな？」

「夜来た時に言えばいいだろう、そう思ったツールだった。」

狩人の里帰り

夜、ユーカが必要な荷物を海に行つた大きな革袋に詰めてトールの家に現れた。

「おう、ユーカか。ちよつと待つててくれないか？ 父さんと母さんが久しぶりの里帰りつてことで荷造りし始めたんだが予想以上に荷物が多くなつたせいで荷車に乗せられなくなつてな……」

トールは苦笑いしながらユーカに現状の説明をした。

「……現状の理解はしたわ。一つ気になる事があるのだけど、トールのお父さんとお母さんは何を持っていいこうとしているの？」

(ま、どうせユクモ村のお土産とかでしょ)

「ああ……説明しないとダメか……」

父さんと母さんが持つていいこうとしているのはな……

家に置いてある道具『全部』だ」

トールの口から発せられた回答はユーカの想像を絶するものだったらしく、その回答を理解するのに時間がかかった。

「えええええっ!?全部って……えええええっ!?」

ユーカの驚きの声がユクモ村に木霊する。

「おい!ユーカ静かにしろ!今は夜だぞ!」

「あ……ごめん」

≡≡≡

「父さん、母さん。ユーカが来たから早く準備してくれよー」

トールが家の中で準備中の親に声をかけると家の奥から慌てたような父——オルドの声でした。

「なに!? ユーカちゃんが来ただっ!? おい!急ぐぞ!」

『オルドさん!どうしましょう!この鍋を入れるものがありませんわ!』

『何い!?その鍋は手で持っていけばいいだろ!』

『ああ!オルドさん!今度は衣服を入れるものがありませんわ!』

『何い!?それは……』

「ねえ、トール……」

「ん?どうした?」

「あんたも大変ね」

「ははは……その通りでございます……」

トールはそう言うとき一度深呼吸をし、自分の頬を両手で パァン と叩くと家の中に鬼のような形相で入っていった。

『父さん母さんなんで引越す訳じゃねえのにそんな沢山持っていくんだよ!』

家の奥からトールの怒声が聞こえてくる。

『それはな……』

『口を挟むな!』

『は、はい!』

『大体、こんなに道具いらねえだろ!! 必要じゃねえ道具は置いていけ!』

そんなトールの声を聞きながらユーカはトールの意外な一面を知ったのであった。

≡≡≡

トールが家に入っていつてから数十分後、トールは二人を連れて家の外に戻ってきた。

「おう! ユーカ。遅くなってごめんな」

「ごめんなさい……」

「い、いや 私に別に気にしてないから大丈夫だよ。本当に大丈夫」

「そうか? なら良かった。さ、ポケケ村に向けて出発しようか」



ユクモ村を出発して5、6時間程度が経過し、出発した時は真つ暗だった辺りには太陽が登り始めていた。

「なあ父さん。あとどれくらいの間がかかる?」

「そうだなあ……今日中には着くと思うが太陽は沈むかもしれないな」

「うへえ……マジかよ」

「早めに着くように努力はしてみるが、お前は寝なくて良いのか? ユーカちゃんは寝てるだろ?」

「んー……俺は別に大丈夫だよ。と言うか眠くなったら元氣ドリンク飲むからさ」

「わかった。だが、無理して起きる必要はないからな」

「うん、じゃあお休み」

「結局寝るのか!?!」

オルドが驚きトールに言葉を返すが当のトールから返ってくるのは寝息だった。

「はあ……相変わらずだな……一体誰に似たのか」

と、オルドが一人言のように呟くと荷車の方から声がした。

「あなたに似たのじゃないかしら?」

その声の主はトールの母であり、オルドの妻である——テイリス——だった。

「俺に似たのか？」

「そうよ？だってツールはあなたみたいに防具は統一しないし、性能よりスキルを重視するじゃない」

「あー……その通りだな。だが俺だって性能を重視するときはあるぞ？」

「本当かしら？あなたがあのウカムルバスを討伐した時もスキル重視じゃなかった？」

「ナンノコトカナ……？」

そんな夫婦水入らずの会話はしばらく続いたとか……



肌を刺すような寒気で目が覚めたツールは辺りを確認する。荷車には父と母の姿はない。そして、前方には村の入口らしき関所が見えた。周囲の確認が出来たツールは眠っているユーカを揺さぶり起こした。

「起きろユーカ！遂に着いたぞ！」

「……何よトー……って寒っ！寒すぎるわよ！」

「あ、思い出した。ユーカに保温性の高い服を持ってこいって伝えないといけなかったんだ」

「それを今言うな……ああ寒い……」

ユーカは体を震わせながらトールを睨み続ける。

「……なあユーカ？ ホットドリンクを飲むという事は思い付かなかったのか？」

「あ……」

「つたく……ほらよ。そんなに寒いなら飲んだ方がいいぞ」

そう言いトールは革袋からホットドリンクを取り出すとユーカに渡す。

「ありがとう」

ユーカはそう一言返すとトールから受け取ったホットドリンクを飲み干した。

「さ、ユーカ。ポツケ村を案内してやるよ。っても小さい頃の記憶だから期待するなよ

？」

「わかったわ。期待させてもらうわよ」

「人の話を聞いてたのかよ……ま、行くぞ！」

こうして二人のユクモ村のハンターはポツケ村に足を踏み入れた。

狩人の里帰り【歓迎会】

ポツケ村に入った二人はオールド達を探すために足を進める。

「へえ……ここがポツケ村なんだ。なんかユクモ村とは違う趣があるわね」

「だろ？ って言っても俺がポツケ村で生活してたのは6歳までだったからな……そんな
に覚えてないんだよな」

と、二人が武具屋の前を通りかかったとき、武具屋の男性が声をかけてきた。

「そこハンターさん。もしかしてトール君かい？」

急に自分の名前を呼ばれ驚くトールを他所に、男性は話を続ける。

「いやあ、懐かしいね。覚えてるか？ トール君がまだ生まれて間もない頃よくお守りを
した叔父さんだ。いやあ……大きくなって……トール君が来たという事はさっきの二
人はオールドさんとティリスさんか！ ちらっと見ただけでわからなかったけどなんか見
覚えのある人だな、なんて思ってたけどやっぱりか！ いやあ……本当に嬉しいよ。ポツ
ケ村にお帰りなさいだな、トール君」

と、自分の言いたいことを言い終えた武具屋の叔父さんは、店から飛び出るとトール
の下に行くと、トールの手を握り嬉し涙を溢した。

「ははは……こんなことで泣いちやうなんて俺も歳を取ったなあ」

「そんなことないですよ、叔父さん。ただいま……かな？俺はユクモ村でも元気でしたよ」

「おお、そうか。トール君が元気なら俺は頑張れるさ。」

とところで……その女性はトール君のお嫁さんかい？」

叔父さんの言葉に一瞬その場の時間が止まった様に静かになった。

そして……

「いやいやいや！そんな関係じゃないですよ！なあ！ユーカ！」

「そ、そうよ！ただの狩り仲間よ！ね？トール！」

そう二人とも答えたあとと顔を見合わすと頬を赤く染めて顔を背けたのだった。

≡≡≡≡

あれから二人が落ち着くまで、数分程かかった。

先に気分が落ち着いたトールは数回深呼吸すると、叔父さんに一つ問うことにした。

「……それで叔父さん。父さん達がどこに行つたか知らない？さつき姿を見たいな事を言つてたけど……」

「うーん……どうだろうね。しつかりと見た訳じゃないからはずきりとは言えないけど多分ギルドマスター達に挨拶しに行つたんじゃないかな？」

「ありがとうございます！それじゃあ集会所に行ってみますね！ほらユーカ、行くぞ！」
「……………えっ？ちよつと腕引つ張らないでよ！」

トールに引つ張られるようにユーカはポツケ村の集会所に向かつていった。



二人が集会所に着くと叔父さんの言う通り、オールド達は集会所で楽しそうにポツケ村のギルドマスターや、村長達と会話を始めていた。

「父さん、先に行くなら教えてくれてもよかったじゃんかよ」

「んあ？トールか。いや、お前が実にぐっすり寝ていたから起こすのもあれだと思ってな？」

「……………本当は？」

「……………本当にトールは鋭いな、起こすのが面倒だったんだよ。まったく……………こんな大衆の前でんなこと言わせるなよ……………」

トールとオールドの会話を遮るようにティリスが口を挟んだ。

「ごめんねトール。お母さんは起こそうと思ったんだけどお父さんが早く行きたいって煩くてね……………」

「母さんがそう言うなら……………」

トール一家の話が落ち着いた所でギルドマスターが口を開いた。

「まあまあ、久しぶりのポケケ村なんだしそんな暗くてどうするのよ、今日は楽しまな
くちやダメよ？」

さ、トール君も……………？貴女は誰かしら？」

ギルドマスターはユーカを見ながら「誰？」と首を傾げた。

「えっと……………ユクモ村のハンターのユーカと申します」

ユーカがそう答えるとギルドマスターは

「トール君のお嫁さん？」

と、また首を傾げて言うのであった。



「えっと……………ユクモ村のハンターのユーカと申します」

私がそう答えた直後、目の前にいるギルドマスターらしき女性はなぜか

「トール君のお嫁さん？」

と言葉を放った。

まったく訳がわからない……………なんでこの村の人は私がトールのお嫁さんに見えるの
だろう……………

トールに助けを求めるように視線を送ったら目を逸らされるし……

はあ、とため息を吐いたあと私はこのまま誤解されたままは嫌なので、

「トール君とはただの狩り仲間です」

と、きっぱり言ってやった。トールの方を横目で確認すると、なんか落ち込んでいる様に見えたのだけど、落ち込むところなんてあつたかしら？

まあ、今はこの歓迎会を楽しみましょうか。料理も出てくるらしいしね。

なんて思っていたら私の前に飲み物の入ったグラスを持ったギルドマスターらしき女性が立っていた。

「ユーカさんだったかしら？このギルドのマスターをやっている者よ。以後お見知りおきを。」

はい、どうぞ。美味しいわよ？」

「あ、ありがとうございます」

やっぱりギルドマスターだったんだ。ユクモ村のギルドマスターは龍人族のお爺さんだったけどこの村のギルドマスターは女性なのね。なんて思いながら受け取ったグラスの中に満ちている飲み物を一気に飲み干した。だつて喉乾いてたんだもん。

「あら、いい飲みっぷりね。美味しかったかしら？黄金芋酒は」

……ん？今あの人なんて言った？芋酒？酒え!?

嘘でしょ……あれがお酒だったなんて……

確かになんか身体がポカポカし始めてきたけど……

ああ……ダメ……意識が朦朧としていく……

走馬灯のようにユクモ村での思い出がフラッシュバックされる。

トールと温泉に浸かっていることや、トールと温泉に浸かっていることや、トールと温泉に浸かっていることだけなのよ！

なんて思っている間に私の意識は途切れた。

狩人の里帰り【歓迎会・続】

目が覚めると視界に見慣れない天井が広がっていた。現状を確認すると、宿泊所の一室であることがわかった。枕元にはユクモ村から運んできた荷物が置いてある。

「あれ……何でこんな所に？ 確かお酒を呑んでから……」

その先の事を思い出そうと思っただ途端に頭が痛み思い出す事が出来なかった。

「……恥ずかしいけどツールに聞いてみようかな」

そう決断したユーカは荷物の中から衣服を取りだし、着替えてからその宿泊所を後にした。

≡≡≡

宿泊所を出たユーカはToolの居場所を探るために先ず集会所に足を踏み入れた。

「すみませーん……」

「あら、ユーカちゃんじゃない？ どうかしたの？」

ユーカが挨拶をすると入口近くに立っていたギルドマスターことユーカを酔わせた張本人が声を掛けてきた。

「あ、どうもギルドマスターさん。あのトールって今どこに居るかわかりますか？」

「え？トール君？そうねえ……貴女が村に入ってきた時の門の近くに家があったと思うけどオールドさん達はそこにいると思うわよ？」

「ありがとうございます！」

「いえいえ困った時はお互い様よ〜」

そうして目的の情報を得たユーカは集会所を出るとギルドマスターの情報を頼りにトール達がいるであろう場所に向かった。

集会所を出た時、壁の修理を行っているのを見かけた。

(？村に来たときは集会所の壁に穴なんて無かった筈なんだけど……)



ギルドマスターに教えられた家に着いたユーカは玄関を叩いた。

「すみません。トールいますか？」

その数秒後、家の中から女性の声が聞こえトールの母、テイリスが玄関を開け現れた。「あら、ユーカちゃん。トールなら奥の部屋で寝てるわよ。ま、上がって上がって」

テイリスに無理矢理に近い形で家にながらされたユーカはトールの寝ている部屋に連れていかれた。

「え？トールとオールドさんどうしたの!？」

「お……………おうユーカか……………」

「やあ……………ユーカちゃ……………ん……………」

二人の顔には青アザが出来ており、腕や脚には包帯が巻かれていた。

「ま、まさかお酒で酔った私が……………」

「いや……………それは違う……………」

「え？じゃあこの怪我は誰が……………」

「この怪我を負わせたのはな……………母さんだよ」

「テイリスさんが!？」

「ああ……………話すと長くなるのだが……………」



——事はギルドマスターがユーカに酒を飲ませてユーカが倒れるまで遡る……………

「美味しかったかしら？黄金芋酒は？」

「!？」

『お酒』と聞いた瞬間、ユーカは平常心を失ったような状態になり、顔を真っ赤にしなからその場に倒れた。

「あら？もしかしてユーカさんはお酒ダメだったかしら？」

酔わせた張本人は頭上に『?』が浮かんでいるような表情を浮かべた後、オールド達にもお酒の入ったグラスを渡しに向かった。

「オールドにテイリス、お久し振りね」

「いやあ、久しぶりですね。トールが六歳の頃ですから……13年ぶり位になりますかね」

「もうそんなに経つのね……今でも覚えてるわよ？オールド、貴方が雪山でティガレットスに襲われて村にやって来たことから村を救った事まで……まるで昨日の事みたいに鮮明に覚えてるわ。」

さ、お二人ともこれを呑みながらユクモ村でのお話を聞かせてくれるかしら？」

そう言つてギルドマスターは二人に黄金芋酒の入ったグラスを二人に渡すと、受け取つたオールド達はユクモ村での出来事を語り始めた。



「……………んでユクモ村で教官を始めて数ヶ月位に来たのがユーカちゃんなんだ」

「へえ、そうだったのね。彼女は どうしてハンターになろうと？」

「んー？俺はよく知らねえがこれはユクモ村の村長に聞いた話なんだが、ユーカちゃんは両親ともにハンターでな？両親はユクモ村を代表するハンターだったんだがユーカ

ちゃんが三歳位の時にとある古龍の討伐に向かったらしいんだが、村に帰ってこなかった……らしい」

「彼女にそんな事があったのね……」

「ま、俺の指導のお陰でユーカちゃんは今じゃユクモ村の中では三本に入るぐらいの実力を持つてるんだぜ？」

な、ティリス」

オールドがティリスの方を向くと、顔を赤くして焦点の定まってない目をしたティリスがいた。

「ひやつほお……おるど、どーかした？」

「んなつ!? ティリスお前何杯酒呑んだんだ!?!」

「えーつとねえ……10杯!」

ティリスは両手パーの形にして突きだしながら答えた。

「じゅ、10杯!?! お前はバカか!?! 何でそんなに呑んでるんだよ!?!」

「あー! バカっていうほうがバカなんだよー! やーいオールドのバーカ!」

ティリスの反応を見たオールドは「ダメだコイツ。早くどうにかしないと」と思った次の瞬間、

「バカっていうオールドにはお仕置きが必要だねえ」

と言うとティリスはどこからともなくかつて愛用していたしろねこハンマーをオールドに向け躊躇いもなく一撃を食らわせた。

「うぼあつ!？」

一撃を受けたオールドは間抜けな声をあげながら集会所の壁を突き破り外に飛ばされた。



「つて事があつたんだよ」

と、トールは説明を終えた。だが、一つ謎が残った。

「ねえ、オールドさんが飛ばされたのはわかったけど何でトールも怪我をしてるわけ？そこだけ納得がいかないんだけど……」

「……言わないとダメか？」

「なんか言いにくい理由でもあるの？」

「あると言えばあるし、ないと言えはないんだが……」

「なら良いじゃない。こっちは気になるから早く話してよ」

「わかったよ……父さんの怪我は母さんがやった。だけど俺に怪我を負わせたのはな……ユーカ、お前なんだよ」

「へ？」

ユーカはトールの言葉に目を丸くしながら話を聞き続けることにした。

「お前が酒で倒れたのを見てたから俺はお前を休める場所に連れていくことにしたんだよ。」

んで、部屋に連れて行った途端にお前の目が覚めたんだよ。ただ、その時は顔が赤かったからまだ酔ってたんだと思う。で、話を戻すと 目が覚めたお前が俺の顔を見た途端に殴りにかかってきてな。驚いた俺は何も出来ずにただ殴られ続けて気が付いたらこのザマだよ」

話終えたトールはユーカの顔を見ると青ざめた表情をしていた。

「えーつと……そのユーカ？」

「……………」

「おーい？ユーカ？大じよ……」

「ごめんなさい！」

トールが 大丈夫か？ と聞こうと思った瞬間に、ユーカの「ごめんなさい！」で言葉を遮られた。

「ユーカ、その別に謝らなくてもいいぞ？」

「ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！」

「聞いてるか？謝らなくてもいいんだぞ？」

「ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！」

「はあ……ダメだこりや」

「ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！」

「このごめんなさいの下りは一時間程続いたとか続かなかったとか……」

狩人の里帰り【農場探検】

トール達がポケケ村に来てから4日目——怪我を負ったトールとオルドも生活に差し障りのないほどまでに回復していた。今日はトールにポケケ村について案内してもらった事になっていた。

「ほんとトールって怪我の治り早いわね」

「そうか？至って普通だぞ？」

トールは首を傾げながら答えた。

「普通って……普通はあんな怪我すぐ治らないわよ」

そんなトールの答えにユーカはやれやれといった様子で答えた。

「で、トール？今日は一日頼むわよ？」

「ああ、取り合えずユーカが気になるって言うていた農場に行こうかと思ってるけど問題ないか？」

「ええ、別に何も無いわよ」

「よし！それじゃあ行くぞ！」

トールは声をあげると農場までユーカを先導して行った。

≡≡≡≡

農場に着いた二人は農場内を散歩していた。

「へえ……ここの村の農場はユクモ村とは違って釣り堀があるんだ」

「らしいな。」

小さい頃の記憶が曖昧だから農場がどんな風だったのかは覚えてなかったから新鮮な気分だな」

「ねえ、トール。ここで釣りって出来るのかな？」

「ん？」

ユーカの方を向いたトールは釣り堀を見て目を輝かせているユーカを見て自然と笑みが溢れた。

「ちよ……なんで笑うのよ？私何かおかしかった？」

「はは、すまん。なんか釣り堀に興味津々なユーカを見てたら自然と笑えてきてな」

「なっ?!釣り堀に興味示しちゃダメなの？」

ユーカが少し怒りの表情になってきたのをみたトールは話を無理矢理変えようと

「お、あんな所に昼寝してるアイルーがいるけどあのアイルーに聞いてみようか」

そう言って昼寝をしているアイルーの下に駆けていった。

「あ、待ちなさいよツール！」

ユーカもトールの後を追うようにアイルーの下に向かっていった。

◆

ユーカがツールに追い付いた頃にはツールはアイルーと釣りが出来るかの交渉をしていた。

(どれくらいかかるんだろ……)

と、ユーカが思ってから間もなくツールが

「ユーカ！釣りにしても大丈夫だってさ！」

と、叫んだ。

その時ユーカは、

(早っ!?)

と、心の中で思っていたりしていた。

◆

釣り堀の近くにいたアイルーに許可を得て釣りを始めて数分たった頃、トールの釣竿に魚がかかった。

「おっ！きたきた！どりやああああ!!」

ツールが勢いよく釣り上げた勢いで魚は栈橋に叩きつけられると数回栈橋の上で跳

ねた後死んだように動かなくなりそして……

爆発した。

「うひゃっ!?!」

トールが女のような悲鳴をあげると何があつたのか理解したアイルーがトールに一言告げた。

「にゃー、カクサンデメキンは丁寧に扱わないと爆発するにやよ?」

「まったく……トールは勢い付ければ良いってものじゃないでしょ?」

「はい……ごめんなさ……つてユーカ!釣竿に魚がかかつてるぞ!」

「え!?!」

トールがそう言うのでユーカは釣竿を確認すると確かに魚がかかつていた。しかも、その魚影は他の魚とは比べ物にならない程大きい。

「にゃー……これは大物にゃ!」

ユーカが釣竿に力を入れ引き上げようとした瞬間、魚も自身の危機を感じたのか抵抗し始めた。

その魚の抵抗はユーカが今までに釣った魚とは別の次元のような感じである。気を

抜けばこのまま水の中に連れていかれる……それほどの力である。

「っ……………」

ユーカも負けじと釣竿に力を入れていくが、魚の抵抗が激しくどんどん手に力が入らなくなっていく。

（もう無理……）

そうユーカが目を閉じ思った瞬間、釣竿が少し軽くなった。

そしてユーカの隣からトールの声が聞こえた。

ユーカが目を開くとユーカの持つ釣竿をトールの姿が見えた。

「ユーカ！こんな大物諦めたら勿体ないだろ？」

一人じゃ無理なら二人で釣ればいい！」

「……………そうね！ここで諦める訳にはいかないわ！」

二人の力が魚の力を越えたのか、先程までの魚の抵抗がそれほど苦に感じなくなっていた。

「よし、ユーカ！タイミング合わせて釣り上げるぞ」

「わかったわ！」

「「いち……………」」

「にの……」

「さああん!!」

二人が釣竿をあげると

ザッパアアアン!!

と言う音と共に先程まで水の中にいた魚が宙を舞う。その魚の姿を確認したアイルーが声をあげる。

「カジキマグロにや!!」

そして宙を舞っていたカジキマグロは重力に従うように落ちて……………

栈橋に突き刺さった。

「やったあああ!!」

「すごいにや!まさかカジキマグロを釣り上げるだにやんて。しかもこんな立派なものをにや!」

二人と一匹は感嘆の声をあげると握手を交わした。

三三三三

握手を交わしたあとユーカ達は一度農場を出てカジキマグロを保管するために村長に農場の奥にある氷の貯蔵庫を借りようと村長の下に向かっていく途中、武器屋のおじさんに声をかけられた。

「そいつはカジキマグロじゃないか？よし！ちよつとそいつをこつちに渡してくれないか？」

ユーカはてつきり保管しやすいように下処理してくれる……と思いきやカジキマグロをおじさんに渡した。

「お願いします」

「おうよ！任せとけてー！」

おじさんはそう言うとかジキマグロを持って武器屋の奥に入っていった。

それから数分後、おじさんがカジキマグロを持って店の奥から現れた。

しかし、カジキマグロの姿は渡した時とあまり変わりなく、数分間何をしていたのかと疑いたくなるものである。

「えつと……カジキマグロを保管しやすいように下処理してくれるんじゃないんですか？」

「ん？何言ってるんだ？俺はこのカジキマグロを武器として生まれ変わらせたんだぜ？」

そう言いおじさんはユーカに武器となったカジキマグロをユーカに渡す。

渡されたカジキマグロは渡す前に比べると多少重くなっており、そのヒレの部分は刃のように鋭くなっている。

「その武器の名前は『レイトウ本マグロG』だ！最新の技術を応用した武器なんだぜ？しかも氷属性はなんと700越え！更にカジキマグロが腐らないように防腐処理もしっかりしてある！さらに……」

このまま語らせると長くなりそうだと感じた二人は早足でその場から立ち去っていった。



「すげえな！ユーカ！まさかあの魚が武器になるとは思わなかったもんな！」

トールが声をかけてもユーカからは何も返ってこない。ユーカは下を向いて歩いている。まるで落ち込んでいるようである。

「ユーカ？」

トールはユーカの顔を覗くとユーカの頬を涙がつつたっていた。

「おいユーカどうして泣いてるんだ!？」

「……………った」

「ん？何て言った？」

「カジキマグロ…………ぐすつ…………食べかった…………」

「お前、まさかそんな理由で泣いてたのか？」

「そんな理由つてなによ！ユクモ村じゃあの魚獲れないじゃん！」

ユーカが泣いていた理由は食べようと思っていたカジキマグロを武器にされてしまったせいらしい。

取り合えずツールはユーカを慰めようとするが、ユーカは泣き止まずどうしようもなくなつてしまった。

（クソ…………こんなにユーカが落ち込むなんて…………こんなとき何て声をかければ良いんだよ!!）

さて、そう深く考えなくても良いんだ！あの一言を伝えるだけで良いんだよ！

「なあ、ユーカ」

「ぐすつ…………なによ…………」

「また明日も釣りにいこうぜ？そしてまた釣り上げれば良いだけの話だろ？」

「本当に明日釣りにいくの？もし釣れなかったらどうするの？」

「釣れなかったらその次の日に行けば良いだけの事だろ？」

「じゃあその次の日が釣れなかったら？」

「そんな釣れるまで行くだけの話だ。だからさ、そんな悲しそうな顔をするのはやめろ。見てるこっちも悲しくなっちゃうだろう？」

トールのその言葉を聞いたユーカは涙を拭うと、大きく深呼吸をすると笑顔になった。

「うん、やっぱりユーカには笑顔が一番だな」

「ほ……褒めたって何もないんだからね！」

「わかってるって。さ、明日も釣りにいくんだからしつかりと休もうぜ」

「絶対に明日も釣りに行くんだからね？嘘ついたら許さないんだから」

そうユーカは笑顔で言うのだった。

狩人の里帰り【その頃のユクモ村】

「ハアッ！」

溪流の二番に双剣の空を切る音が響く。双剣を振るうその奇怪な見た目のマギユル防具を纏ったハンター《シマ》は、愛用している双剣——夜天連刃【黒翼】を背負うとアイテムポーチから携帯食料を取りだしマギユル防具の隙間から口に押し込んだ。

「ふう…… やはり技の鍛練は毎日行うものだな。そう思うだろ？ イーシャ？」

シマの問いかけに崖に腰かけていた忍者のような風貌のナルガ防具を身につけたオトモアイルー イーシャは答えた。

「なに呑気なこと言ってるにや。大体今はクエスト中にやよ？」

そんなイーシャの答えを「ははは……」と笑って過ぐそうとするとそのシマの態度を見たイーシャは声を荒らげ詰め寄ってきた。

「その態度はなんにや！ いつもいつも調子に乗ったような態度をして……」

「イーシャ」

「なんにや」

「この狩りが終わったらマタタビを好きだけ買ってやる」

マタタビと言う言葉に反応したのかイーシャは荒らげていた声を落ち着かせ、

「本当にや?」

「本当だ。俺の財布の金ゼニを全部使っても許す」

シマがそう言うといーシャの表情が明るくなった(ような気がした)。

「始めからそう言っておけばよかったのにや。」

さっさとクエスト終わらせてマタタビ買いに行くにや!」

◆◆◆

今回シマが受けたクエストは家畜であるガーグアを襲ったドスジャギイの討伐である。

そのドスジャギイによる被害はかなり深刻で村の大半のガーグアが死傷しており農業等に影響を与えていた。

「いーシャ。今回のドスジャギイは普通のドスジャギイと思わないほうが良いかもしれない」

「どういう事にや?」

「ハンターとしての勘だ」

勘 と言う言葉を聞いてやれやれと首を横に振るいーシャだったがその時エリア内

に何か動く音が聞こえた。その音を聞いてシマは背負っている夜天連刃【黒翼】を構えた。

「イーシャ……来たぞ。いつも通り行くぞ」

「わかつてるにゃ」

イーシャはドスジャギイが気付くより早く近付くとドスジャギイに一撃を食らわせた。

その攻撃でイーシャに気付いたドスジャギイは配下のジャギイ達を呼ぶための咆哮をあげた。

イーシャは咆哮をあげ無防備なドスジャギイに素早い攻撃を与え続ける。

シマはドスジャギイが怯んだ隙をみて加勢に行こうとするが、ふとあることに気付く。

（まだジャギイ達が来ていない？何かがおかしい）

違和感を感じふと視線を岩壁の上向けるとそこに数体のジャギイが今にもイーシャを襲おうとしていた。

「っ！イーシャ上だ！」

「にゃ!？」

シマは声を出すのと同時に夜天連刃を構え走り出していた。

シマが走り出すのと同じタイミングで上にいたジャギイ達が一齐に飛びかかっていた。

「ハアツ！」

シマは飛びかかってくるジャギイ達に夜天連刃による攻撃を与えていく。

空中で攻撃を受けたジャギイ達はそのまま地面に叩き付けられた。

(やはりコイツは今までとは違うようだな)

配下のジャギイをやられた事に気付いたドスジャギイはイーシャからシマに標的を変えシマの喉元を咬みちぎろうと迫ってくる。シマは迫ってきたドスジャギイの右目を夜天連刃で斬りつけ視力を奪った。

右目の視力を奪われたドスジャギイは尻尾を振り回して攻撃に転じる。が、シマはその攻撃を夜天連刃で往なすとドスジャギイに生まれた隙を狙い連撃を食らわせていく。

シマは右目が見えないことを利用してドスジャギイの右側を攻めていく。そしてタイミングを見計らつての鬼人化で更なる攻撃を行っていく。

(あと少しで倒せそうだ……っ!?)

乱舞の最後の一撃が届く瞬間、シマの背中に大きな衝撃が起き体勢を崩してしまつた。

シマの連撃から逃れたドスジャギイは巣穴を向かって逃げていく。

「チツ…逃がすか!」

シマが後を追うように向かうがその前に2、3体のジャギイが立ち塞がった。

「コイツらまさかドスジャギイを庇ってるのか!」

今まで戦ったドスジャギイ達の群れも統括されていたのだがこれまで統括された群れは戦った事がない、とシマは思った。それと同時に恐怖を覚えてしまった。

その恐怖によってシマは一瞬だが隙を与えてしまった。ジャギイ達はその隙を利用し巣穴に逃げて行ってしまった。

「何やってるにや」

「あ、うん。そのびっくりしてた」

「やれやれにや……」

ペイントボールはぶつけておいたにや」

「ありがとう、助かったよ」

シマはアイテムポーチから砥石を取り出すと夜天連刃の刃を研いで夜天連刃を背負った。

≡≡≡

ペイントボールの匂いを辿って移動していた一人^ふと一匹^ただったが途中である違和感を感じた。

「にや？匂いが消えたにや」

「イーシャも気付いたか。どうやらペイントボールの匂いを落とす可能性が高そうだな」

「ドスジャギイにそんな知能があるのかにや？」

「それはわからないが……取り合えずペイントボールの匂いが最後にあつたエリアに向かおう」

そう言つてエリア6に向かうとシマの予想通り巣穴の近くの水がペイントボールの色に薄くだが染まつていた。

「……どうやらここで洗つたみたいだな」

「どうするにや？これじゃあアイツの居場所がわからないにやよ？」

「そんな事はないぞ。ほれ」

シマはそう言つてアイテムポーチから千里眼の薬を取り出すと一本飲み干した。

「ん？アイツエリア2にいるぞ？」

「と言うことはここには洗いに来ただけつてことかにや？」

「かもな。行くぞ」

≡≡≡≡≡

エリア6から2へと続く坂を登り終えるとシマは小声でイーシャに「伏せろ」と命令

した。

なぜそのような命令を出したのか不思議に思ったイーシャはシマの見ている方を見るとそこには眠っているドスジャギイの回りを護衛するようにジャギイ達が並んでいた。

「こりや閃光玉を使うしかないか？」

「そんな事したらすぐバレるにや。ここはけむり玉の方がいいとおもうにや」

「了解だ。じゃあけむり玉を使ったあとはイーシャ、お前にジャギイの始末を頼めるか？」

「その間にシマがドスジャギイを相手するにや？」

「ああ、じゃあいくぞ！」

シマが地面にけむり玉を投げつけるとエリア2一帯がけむりで覆われた。

イーシャはその不安定な視界の中での確にジャギイの数を減らしていつている。

そして護衛の薄くなったドスジャギイにシマが夜天連刃による乱舞で斬り刻んでいく。途中、目が覚めたドスジャギイが攻撃をしてきたが、シマは素早く避けスタミナが切れるまで連撃を与え続けた。

そしてけむりが晴れるのと同時にドスジャギイは絶命していた。

「イーシャそつちは終わったか？」

「勿論にや。そう言うシマはどうにや？」

「ああ、ちゃんと討伐完了したよ。」

さ、村に帰るぞ」

「マタタビはちゃんと買って貰うにやよ」

「うぐつ……わかつたよ……」

そうして村を騒がせていたドスジャギイの討伐は完了したのだった。

◆◆◆

村に帰ったシマ達は約束通り行商人からイーシャの満足するだけのマタタビを買わされ、財布の中身が雀の涙程になってしまい、シマの生活費が全てアイテムを売って稼ぐことになってしまったのだがそれは別のお話？

「にや〜！マタタビ最高にや〜！」

「はあ……もうこれからはマタタビを買い貯めしておかないとな……」

狩人の里帰り【嵐の密林で】

まだ誰も起きていないであろう時間帯——ユクモ村のハンター・トールは真夜中のポツケ村を一人で散歩していた。

店主も寝ているであろう武器屋の前を通りかかるとトールは足を止め、

「……眠れないなあ」

そう呟き、再び歩き始める。

そんなとき、集会所に入っていく一つの影が目に入った。

「こんな時間に誰が？」

トールは自身の好奇心に動かされ集会所に向かうのだった。

◆◆◆

トールは集会所の入口の影に身を隠しながら中にいる人物を確認した。

（装備からするとハンターのようだけど……）

中を確認すると、そこには集会所の長椅子をベットのようにして寝ている様子のハンターらしき人物がいた。

トールはその人物が気になったが何せ今は真夜中である。多少目が闇に慣れているにせよ明かりの点いていない集会所の中は見にくいものである。

(知らない人の寝顔を見るのはいい気がしないけどここは行くしかないよな)

トールが集会所の中に足を踏み入れた瞬間、

「誰だ！」

(!?)

眠っていたハンターらしき人物はトールの気配を察知したのか体を起こすと、投げナイフをトールの顔近く目掛けて投擲してきた。

とっさに体を反らしたトールに投げナイフが刺さることはなかったが、代わりにトールの近くの柱に投げナイフは刺さっていた。

トールがナイフを投げた人物の方を向くとその人物はトールの前に立っていた。

「お主、何者だ。こんな夜更けに何をしている」

集会所で眠っていたハンターの正体は、女性であった。

そのハンターは未だにトールに警戒の目を向けている。

「実は眠れなくて散歩をしている時に集会所に入っていく人影が見えたので確認しよう
と……」

「ふむ。それでここに来たのか……」

「……はい」

女性ハンターはしばらくトールの顔を見つめ、何かを思い付いたように口を開いた。「やはり君はオールドに似ているな。いや、失礼。昔のメンバーの事を思い出してしまつてな。今は確かユクモ村という村で教官をやっていると聞いたが……」

「あの……」

「む? どうした?」

「実は……オールドは俺のお父さんです」

トールがそう言うのと女性ハンターは驚愕の表情を見せ、村に響く程の大声で叫びをあげた。

「えええええツ!?!」

≡≡≡≡≡≡≡

あれから数時間ほど経ち、夜は明け村には日が登っていた。

そしてトールは自分の父親——オールドに会いたいと言う女性ハンター——ソラウを家に連れてきていた。

「いやあ……まさかあの少年がオールドとテイリスさんの息子とは……驚きが隠せませんな」

こんな事を言っているソラウはかれこれ1、2時間程同じことを繰り返している。そ

れを同じ時間聞いているオールドは呆れた顔をしながらソラウの言葉に相槌を打っていた。が痺れを切らせたのかオールドが話の本題に入るため口を開いた。

「ところでソラウ。なんか用でもあるのか?」

「はい。実は密林にて古龍クシャルダオラが確認されまして、近くの村の物流が完全に止まってしまい村が孤立化してしまっているのです」

古龍クシャルダオラ。ツールには聞き覚えのない名前だったが古龍と名が付くと言うことはかなりの強敵になると予想はできた。

「そこで討伐を依頼しにハンターを探しに来ていたのか」

「はい。一応他の村にも使いは出したのですがどこも承諾してくれず最後の頼みでこのポツケ村に来たわけです」

「と言うことだがツール。お前は どうする? お前にとつたら初めての相手だが挑んでみるか?」

「もちろん!」

ツールがそう答えるとオールドはその答えを予期していたかのように頷いた。

「よし、なら準備をしておいてくれ」

オールドがそう言うくとツールは準備をするために部屋に向かって行った。

トールの姿が見えなくなるとソラウがしぶしぶ口を開いた。

「お、おい。オルド……流石にそれは……」

「大丈夫だ。アイツは将来ユクモ村を守護まもるハンターになってもらわないと困る。その為にはこれくらいもやってもらわないと困るからな」

「オルドがそう言うなら構わないが……」

「さて、俺も準備するでしょう。そうだソラウ。お前に隣の宿にいるユーカっていう娘を起こして来てくれないか？　その娘もユクモ村の将来の為に成長してもらわないとな」

「フフツ……教官みたいですな」

「『みたい』じゃなくて教官だからな……」

≡≡≡≡≡≡

準備を終えたトールは家の外でオルドに借りた情報誌を読んでいた。

「古龍クシャルダオラ……鋼龍と呼ばれる古龍である。風を体に纏っている。毒属性の攻撃で風を封じる事が出来る……って書いてあるけどまったく想像出来ないな」

そんな風に考えていたトールの頭を後ろから現れたユーカが小突いた。

「何考えてるのよ。トールらしくないわね」

「よっ、ユーカ。実はクシャルダオラについて少し調べておこうかなって思ってたね」

「私もソラウさんから少し聞いたわよ。角で風を操ってるらしいわよ。まったく想像出

来ないけど」

「だよなあ……まあ念には念を押しして回復薬は沢山持つてきたから少しは安心出来そうだな」

「そうね少しはね」

そんな感じの会話をしているとやつと準備を終えたオルドとソラウの二人が現れた。

「すまん、武具を選ぶのに手間取っちゃってな」

オルドが身に纏っている防具は奇怪な見た目の防具である。ツールとユーカはその奇妙な防具が気になっていた。

「ああ、この装備か？　これは古龍オオナズチの素材から作れるミズハ防具だ。クシャルダオラと戦うならこの防具だと思ってな」

「オルドが語りだすと長くなりそうなので早く出発しましょう。船を手配してあるので農場に向かいますよ」

ツール達は率先して向かうソラウの後を追うように農場に向かって行った。

◆◆

「さて、密林に着いたが予想通りだな。なあソラウ」

「ですね。やはりクシャルダオラが現れる時は雨風が強くなりますね。しかし、この雨風の量は異常ですね」

オールドとソラウは現状をすぐ把握することが出来たがとユーカは理解するのに少々時間を要した。

「ねえ、トール……流石にこの雨の中に長くいると風邪になりそうよ」

「だな……さっさと片付けようぜ」



トールとユーカはオールド達の後を追うように密林を移動しているとオールド達が急に足を止めた。

「……いるな」

「いますね。どうします？一応毒投げナイフは持つてきましたが」

「ああ、頼む。早めにあの風は消しておきたい」

「了解しました」

ソラウはアイテムポーチから刃に毒の滴る投げナイフを5本取り出すと未だにこちらに気付かず歩いているクシャルダオラに向けて投擲した。

「フツ！」

まず一本目の投げナイフがクシャルダオラの甲殻を貫き体に刺さる。その痛みでこちらに気付いたクシャルダオラは咆哮とともに風を纏うが、ソラウのナイフを投げる行動は止まらない。

一本、また一本とクシャルダオラの体に突き刺さっていく。そして体に刺さった投げナイフの毒が体に回ったのか、クシャルダオラが纏っていた風がクシャルダオラの周囲から離れるように消えていく。

「よし、行くぞ。ソラウ援護を頼む」

「了解しました」

オールドは背負っていた大剣——ブリュンヒルデをクシャルダオラの左翼目掛け抜くする。

「ふんっ！」

力任せの一撃のように見えたオールドの攻撃は翼の薄い部分を切り裂いた。

左翼の膜を切り裂かれた痛みでクシャルダオラは周囲を八つ当たりのように攻撃する。クシャルダオラの尻尾がオールドに直撃するほどまで近付いたとき、一つの轟音とともにクシャルダオラの尻尾を弾丸が弾いた。

「まったくオールドは援護があるからといって突っ込み過ぎですね。昔と変わってません」

その弾丸を放った主であるソラウは愛弩であるヘヴィボウガンのグラビドギガロアから通常弾Lv2をクシャルダオラの角目掛け放ち続ける。

「トール！何やってる！お前も加勢しろ！」

「お、おう！　行くぞユーカ！」

「え、ええ」

先程までオルドとソラウによる絶妙なコンビネーションに魅せられていた二人は遅れてクシャルダオラとの戦闘を始めた。

二人が接近するのを横目で確認しながらスコープ越しにクシャルダオラを見ていたソラウは大声で叫んだ。

「もうじき毒が切れます。龍風圧に気を付けて下さい！」

ソラウが忠告を終えるとはほぼ同時に毒から治ったクシャルダオラは再び自身に風を纏わせた。

運悪くそのタイミングでクシャルダオラに近付いてしまったツールとユーカは普通の風圧とは違う足を掬すくわれる感覚に襲われ二人ともその場に尻餅をつくような状態になってしまった。

それを好機に思ったクシャルダオラが二人目掛け風を圧縮させたプレスを放とうとしたとき、ミズハ装備の恩恵により龍風圧を受けずに済んだオルドがクシャルダオラの尻尾に強力な一撃を喰らわせた。その一撃は甲殻を、骨をいとも容易く切断した。尻尾を切られたクシャルダオラはバランスを崩しその場に倒れこんだ。

「まったく……ツール。いいか？　狩り場で大切なのは観察と攻撃だ。とにかく隙を見付

けたら殴れ」

再び立ち上がったクシャルダオラはこの場から退避しようとして翼を羽ばたかせるが、オールドによつて傷つけられた左翼のせいで飛竜の代名詞である飛翔を封じられているためこの場から逃げる方法はない。

「さて、今回の依頼は久しぶりだったがかなり動くことが出来たな。我ながら上出来だ」
オールドは一人言のように呟くとクシャルダオラに歩いて近付き最後に一言、

「安らかに眠りな」

そう言い放つとクシャルダオラの脳天目掛け一撃を喰らわせるとクシャルダオラは絶命した。



「ふう……今回の依頼は中々大変だったな」

「そうですかね？　かなり一方的にやっていたような気がしたのですが……」

「そうか？　まあ、討伐出来たから結果オーライってことで」

クシャルダオラの討伐を終えた四人はベースキャンピングに向かいながらそんな会話をしていた。

「……ねえ父さん」

「ん？　どうしたんだ？　ツール」

「クシャルダオラがいたから雨風が強かった……だよな？」

「ああ、その通りだが？」

「まだ雨風の強さは変わってないよ」

「んあ……」

オルド達が足を止めた、その時今までとは比にならないほどの強烈な風が辺りに吹いた。

「ッ!？」

誰もが体勢を崩さないようにバランスをとっている中、ユーカは雲の隙間からクシャルダオラとは違う別の風を纏う龍の姿を確認した。その龍はまるで羽衣のような翼膜で天を舞うように飛行していた。

ユーカはその龍の事を知っていた。いや、忘れることは出来なかった。かつてユクモ村を襲い二人のハンターによって撃退された古龍。災厄と共に現れその地に終わりを告げるとさえいわれる嵐龍・アマツマガツチ。ユーカの両親はこの古龍と闘い、そして災厄を退けるかわりに消息を絶った。

「アマツマガツチ……」

ユーカの呟いたその一言には深い憎しみの念が込められていた。しかし、この言葉は誰の耳にも届くことはなかった。あまりの暴風に消されてしまったのだ。

そして、アマツマガツチの姿が見えなくなると密林に吹いていた雨風は嘘のように止み、星空が広がっていた。

「……今のは一体何だったんだ？」

「さあ？ 流石の私でもあんな風は体験したことはありませんので……」

≡≡≡

ポツケ村に向かう船の上でオールドはツールに

「ポツケ村に着いたらその日の夜にユクモ村に帰る」

その事だけ伝えると眠りについた。伝えられた内容に驚いたツールだったがすんなりとその事を承諾した。

ポツケ村に着いた四人は依頼の成功をギルドに伝えるとそれぞれの帰路についた。ツール達はユクモ村に帰るための荷物整理をするために家に、ソラウはまだすることがある、と村長の家に向かって行った。

そしてその日の夜。ユクモ村に帰るための準備を終えたツール、ユーカ、オールド、ティリスはポツケ村の入口まで来ていた。

「短い間でしたがありがとうございます」

そう言って頭を下げるツールに武具屋のおじさんが泣きながらお別れの言葉をかけ

ていた。お土産を持っていけだの色々なことを言っているようであった。

お別れを終えた一行は、ネコタクに乗り込むと村人が見えなくなるまで手を振っていた。

「はあ……長かったな……そう思うだろ？ユーカ？」

「……」

「ユーカ？どうかしたのか？」

トールが心配そうにユーカの顔を覗き込むとやっと気が付いたユーカは多少慌てた様子で

「べ、別に大丈夫だから気にしないで」

と一言だけ言うともまた考え込むような表情になってしまった。

「なあ、ユーカ」

「……なに？」

「なんか悩んでるのなら俺に相談してくれよ」

「ありがとう、トール」

トールの気遣いにユーカは笑顔で答えた。

「うん、やっぱりユーカは笑ってる方がいいよ」

「
…
…
ば
か
」

設定

トール 男(19) HR6

・ポツケ村出身の現ユクモ村のハンター。

・不得意な武器はなく、全ての武器の扱いに慣れている。

・スキル重視の装備を選ぶため、防具キメラになりやすい。しかし、ユーカ以外の人物と狩りにいく際は一式揃えて狩りに向かう事がある。ユーカの事を狩り仲間として、親友として信頼しているからこそ防具キメラで狩りに向かう、という事らしい。

・判断力が優れており、何事も冷静に対処する。(ただし、村ではそんなに優れておらず、狩り場でのみ判断力が優れるのでは……と言われている)

・防具キメラの道に進んだ理由は父親兼教官であるオルドが幼いトールに防具キメラについて教え込んだせい。

・ハンターを志した理由はポツケ村の英雄である父親に憧れたから、とのこと。

ユーカ 女(19) HR6

・生まれも育ちもユクモ村、のハンター。

・父親と母親は共にハンターであり、ユクモ村を代表するハンターだったがユーカが幼い頃、とある古龍の討伐に向かった。古龍は撃退出来たが、二人は帰って来なかった。

・かなり冷静にみえてちよつと抜けている部分がある所が玉たまに瑕きず。

・得意武器は大剣。母親が大剣使いだった事もあり、同じ武器を自ら所望した。

・トールとはオールドの開いた闘技場での訓練に参加した際に出会った。

・防具は一式を揃える派。揃えてから装飾品や護石などでスキルを調整する。

オールド 男(47) HR9

・トールの父親

・かつてポツケ村の危機を救ったハンター。

・現在はユクモ村で教官をしている。

・実力はかなりのもので、崩龍ウカムルバスを一人で討伐した逸話をもつ。

・歳の割には力もそれなりにあり、鋼龍クシャルダオラの尻尾を鱗ごと切断するほどの力がある。

・ポツケ村でハンターをやっていた時はパーティーを組んでおり、そのメンバーはオールド、ティリス、ムファイ、ソラウの四人で組んでいた。パーティーの分担も出来ており、この四人にかかれればどんなモンスターも敵ではない、と言われていた。とある

クエストを気にパーティーを解散した。その後ハンター業から手を引き、教官として教える側になることにした。

・トールに防具キメラを教え込んだ張本人。ただ、悪気はなかった単に気が付いたら教えていたらしい。

ティリス 女(45) HR9

・トールの母親

・いつもニコニコしており、優しい母親として有名。しかし、酒癖が悪く、一口飲むだけで酔ってしまいどこからともなく取り出したハンマーで誰かを吹っ飛ばしてしまう。

・得意武器はハンマー。

・近接武器のハンマーを使いながらトリツキーに戦う。サポートに回ることも多く、仲間に攻撃が当たりそうならかちあげで空中に吹っ飛ばし回避させる。(根本が間違っているのは触れてはいけない)

・オールドのパーティー在席中にオールドと結婚。パーティー解散後にトールを授かった。

ムファイフイ 男 享年(28) HR9

・オルドのパーティーに在席したハンター。

・どんな武器でも扱うことに慣れており、近距離、遠距離どちらでも戦える。

・パーティー在席中にとあるモンスターの強襲を庇った際に腕に傷を負ってしまう。その傷のせい、狩猟中に突然痙攣を起こす事があった。

・パーティー解散後は生まれ故郷に帰り、そこで出来た仲間と狩りを行っていたが、ベリオロスの狩猟の際に仲間を庇い命を落とす。

ソラウ 女(38) HR9

・オルドのパーティーに在席した中で一番若い。

・得意武器はヘヴィボウガン。

・パーティーの中ではムファイフイに続いてしっかりしていた。

・歳の割には若く見える。

・パーティーに入った頃は誤射が目立っていたが、日々の鍛練により正確に狙った場所を撃ち抜く事が出来るようになった。

・パーティー解散後は旅のハンターとして色々な村を転々とし、依頼をこなしている。

シマ 男(25) HR6

・ユクモ村に住むハンター。

・何故か常にマギユル装備を身に纏っている。温泉に入る際も頭装備を外す事はないらしい。髪を洗う際は何故か彼の回りに湯気が集まる。まるで彼の素顔を隠すかのよう……

・得意武器は双剣。

・戦いのテーマは『ヒットアンドアウェイ』。ピンチになるとモドリ玉で避ける。(戻れば良いと言う事ではない)モドリ玉は調合分を含め11個常に携帯する。

・中々信頼は厚く、シマさんと呼ばれている。

フレイ 男(20) HR6

・ポツケ村からユクモ村にやってきたハンター。

・得意武器はランス。

・存在が空気。

狩人の帰投

「はあ……やっぱり温泉は落ち着くなあ……。だろ？ユーカ？」

「そうねえ……。ポツケ村にも良いところはあったけれどあそこは温泉がなかったから……」

ポツケ村から帰ってきたツールとユーカは久しぶりの温泉に浸かっていた。

「しかし、俺らがいない間にドスジャギイの被害があっただなんてな。シマさんがいなかったら大変な事になってたな」

「らしいわね。今までのドスジャギイとは少し違う統率が取れていたって聞いたわ。そのトールの言うシマって人がいなかったら今ごろは村の家畜は全滅だつかもしれないわね」

二人は、会話が一段落すると温泉に一人の人物が現れた。その人物こそツールが会話で名を出していたハンター——シマであった。

シマは相変わらず頭にマギユルフロールを被ったままであるが。

「あれ？シマさんじゃないですか？」

「ん？ その声は……やっぱりトール君か！ いやあ、暫く姿を見なかったからね」

「実はポケケ村に里帰りしてまして……。そう言えば聞きましたよ、村を襲っていたドスジャギイを討伐した話」

「はは、大した事じゃないよ。ハンターとして当然のことさ」

トールとシマが会話に花を咲かせている時、疎外感を感じたユーカは一人温泉の端に膝を抱えるような姿で浸かっていた。

(……あのマギユルを被っているのがシマ……さんなのよね。だけど私を仲間外れにするのは少し気に障るわね)

「ところでトール君。さつきからそこで不貞腐れたような顔でこつちを見てる彼女は誰かな？」

「え？」

シマが指差した方を見るとユーカが不貞腐れた顔でこちらを見ていた。が、トールが向いたのを確認すると慌てたように顔を反らしてしまった。

「ああ、彼女はユーカです。俺の狩り仲間……ですかね？」

「トール君のパートナーか。村で姿を見ると時はよく一人だったからってつきりトール君はソロハンターだと思っていたよ」

「ああ、そのことですか。俺は狩りで調査などで沢山道具を使っちゃうせいでよく買い物にいくんですよ。その時は基本一人でいる事が多いんですよ」

「なるほど、そうだったのか。ところでトール君、そこにいるユーカ君の事なんだけど……」

逆上^{のほ}せちやつてるよ?」

シマの言葉を聞いてユーカの姿を確認すると、シマの言う通りユーカは顔を赤くして逆上^{のほ}せていて……。

「うわあつ!? ユーカ!? しっかりして!」

トールはユーカの頬を軽く叩くがユーカの意識は戻らない。

「す、すみません! ユーカが心配なのでもう上がりますね!」

「ああ、それじゃあまた会えたら会おう」

トールはユーカを抱えて温泉から上がると、急いで着替えるとユーカの着替えを持って集会浴場から出ていった。

「……さて、私も温泉に入ろうか」

シマは被っているマギユルフロールを温泉に浸かるために外した。その瞬間、突然湯気が集会浴場内に溢れるほど立ち込めた。

『ニヤ!? なんなんニヤ この湯気!?!』

『ういゝ……ヒック……』

『あわわ……これじゃあ依頼書が湿っちゃいますよ?!』

そんな事が起きていたとはつゆ知らず、シマは温泉に浸かるのだった。

◆◆◆

「うーん……」

ユーカが目を覚ますとそこはなぜか集会浴場ではなく、部屋であった。

不思議に思ったユーカは現状を確認しようとして身を起すのだが、そこであることに気が付いた。

(なんで私服を着てるわけ? 確か温泉にいて……あれ? 途中から記憶が……)

「お、ユーカ気が付いたか。心配したんだぞ? 逆上させたせいで俺の家まで抱えて来たんだからな?」

「そう、ありが………ちよつと待つてトール!? 抱えてきたつて集会浴場からなの!?」
 「ああ、そうだけど? あ、安心しろよ? 服を着せたのは母さんだから。俺はただユーカを抱えてきただけだからな」

「そ、そう………なら安心したわ………(集会浴場からここまで私を抱えてきたつてことは布一枚しか身に纏つていなかつたわけで………)」

「じゃあ俺は母さんにユーカが目を覚ましたつて報告してくるよ。さすがに安静にしてろよ?」

トールはそう言つて部屋から出ていく。

「はあ………ついてないわ………」

他に誰もいない部屋で呟いたユーカの声は、誰にも聞こえることもなく消えていった。



—— 溪流

豊かな自然があり、そこに生息する生き物の種類は豊富である。

草木を好んで食べるものもいれば、それらを好んで捕食するものもいる。

そんなある日の溪流にて、異変は起きた。

雨も降っていないなければ曇り空でもない。空は至って普通であった。が、溪流からは雷の轟く音が鳴り響いていた。

そんな、溪流にあるモンスターの姿があった。

狼のような外見をしており、特徴的な二本の角。そして何より体の回りに漂っている無数の雷光虫……。

そのモンスターは溪流に響き渡るほど大きな声でほえると、その場から溪流の奥に消えていった。

溪流の雷狼竜

— 溪流

「ん？やけに雷光虫が多いな……」

「そうかニヤ？ 別にいつもとかわらニヤい気がするニヤよ？」

いつも通り溪流にて鍛練をしていたシマは微かな溪流の違和感に気付いた。

「これは村長に報告しておいた方がいいかもしれないな。よし、イーシヤ。今日は少し早いが引き上げるぞ」

「？ シマがそう言うニヤら別に問題はないニヤ」

シマは溪流から引き上げる為ベースキャンプに向かつていく。

（この雷光虫の量……ジンオウガか。準備をしてからもう一度ここに戻ってくるか。それまで被害が出ないことを祈るしかないな）

……
……

シマが溪流を離れ村に着いた頃、まるでシマが溪流から出ていくのを待っていたかのように雷狼竜——ジンオウガは溪流に現れた。

ジンオウガは辺りに誰もいないことを感じとると、溪流内に響き渡る程の咆哮をあげた。

ジンオウガが咆哮をするとそれに呼応するかのように辺りに浮遊していた雷光虫がジンオウガに集まっていく。その行動は自身に電気を蓄え身体能力を飛躍的に上昇させる。

そして、一定以上の電気を蓄えたジンオウガは全身の毛を逆立て超帯電状態となった。

超帯電状態となったジンオウガは再び咆哮をあげる。

『——ッ』

その咆哮から数秒後。

まるでその咆哮に返事をするかのように遠方からも咆哮が返ってきた。

それを確認したジンオウガは、また溪流の奥に消えていった。

……

……

「と言うことで村長さん。溪流に雷光虫が異常発生しているので気を付けて下さい。私

は準備を終えてからもう一度溪流に向かいます」

「……はい、わかりましたわ。十分気を付けて下さい」

「はい。それでは失礼します」

シマは村長に軽く礼をするとその場を立ち去り自室に向かつていった。

……

……

「さて、今回の相手はおそらく——いや、絶対ジンオウガだろうな。前回のドスジャギイ
と言い変わった個体が確認されている以上回復薬は多く持っていて損はない」

シマはアイテムポーチに回復薬などを詰め込むと、いつも愛用している『夜天連刃【黒
翼】』ではなく『旋風連刃【裏黒翼】』を取り出した。

そしてそれを背負うと自室から出ていった。

「悪い、イーシャ。待たせたな」

「遅かったニヤ……ってやっぱり狩りに行くのかニヤ？」

「ああ、その通りだ。相手はジンオウガだ。無理せずに危険を感じたらすぐ撤退するん
だぞ」

「わかったニヤ」

……

……

「ねえ、トール？ あれってシマさんじゃない？」

「本当だ。あのマギユル姿はシマさんだよ。でも、なんかいつもとは違う雰囲気だったよ
うな……」

「そうかしら？」

「うーん……」

……

……

「ニヤんかさつきより空気がピリピリしてるニヤ？」

「さつきと片を付けないと被害が出そうだな。行くぞ、イーシャ」

溪流の中を進んでいくとエリア4から5に続く道にかけて雷光虫が大量に浮遊して
いた。

それはジンオウガ自身がそこにいるという証拠にもなる。だが、罨である可能性も無

いわけではない。

シマは気を引き締めると少しずつエリア5に足を踏み入れていく。ドスジャギイ以来、シマは上方にも注意を払うようになっていた。注意を向ける場所は増えてしまうが、その代わり危険になる可能性は減ってきていた。

そして、エリア5に完全に侵入したシマの目の前にはジンオウガの姿はない。

シマは自然と回避の姿勢をとる。

「とうとうことは……」

シマは上方に視線を向ける。そこにはこちらに向け飛びかかってくるジンオウガの姿があった。

「避ける！ イーシャ！」

掛け声とともにその場を回避したシマは背負っていた武器を取ると戦闘態勢に入った。

シマは旋風連刃【裏黒翼】を構えると向かってくるジンオウガの攻撃を自身に当たる寸前に避ける。

そしてカウンターを当てるかのようにジンオウガに刃による連撃を喰らわせる。

「フッ！」

シマはジンオウガが攻撃の動作に入ると先程と同じようにギリギリで避けると旋風連刃【裏黒翼】による乱舞を喰らわせていった。

……

……………

少し離れた場所でジンオウガとシマの戦いを退避し、見ているイーシャは違和感を感じていた。

（なんニヤ？ ああのジンオウガまるで雷光虫をばらまいているように見えるニヤ……）

そして、イーシャの感じた違和感是最悪の事態を招いた。

シマばかりを意識して見ていたイーシャはエリア5の入り口に現れたもう一匹のジンオウガに気付くのが遅れてしまった。

「ニヤツ!!」

シマの様子を見るがまるで気付いていない様子である。

イーシャはなぜジンオウガが雷光虫をばらまいているかのように見えるのか理解した。

電気を操るジンオウガが何処から現れても気付かせない為である——と。辺りに雷光虫を浮遊させることでその事に気付くことを鈍らせるのだ、と。

「……後でマタタビを買って貰うニヤツ!!」

……
……

「チツ……ちよこまかと逃げやがって！」

突如、ジンオウガが足を止めた。

それを絶好のチャンスとみたシマは武器を握りしめて攻撃の態勢に入ろうとした。

その時、イーシヤが何かを叫んでいることに気が付いた。

「——ろ——ニヤ!!」

「何を言って——ツ！」

シマはイーシヤの忠告を無視して武器を振り続ける。

するとイーシヤが先程より近付いてきた。

「シマ! 後ろニヤ！」

「後ろ?——ツ!？」

シマが後ろにいたジンオウガに気付いた時にはすでにジンオウガはその鋭い爪の生えた前足を振り上げているところであった。

「クツ！」

シマは腕で顔を守ろうとした時、自分の腹部に何か当たった。

「なっ!? イーシヤ!!」

イーシャがぶつかった衝撃でその場から軽く弾き飛ばされたシマがイーシャの方に目を向けると――

「嘘……だろ」

ジンオウガの爪による一撃を受け、力尽きているかのように倒れているイーシャの姿であつた。

戦線離脱

シマはイーシャを拾い上げると、イーシャを脇に抱えそのエリアから逃げ出そうと駆け出す。

しかし、ジンオウガもただでは逃げさせないと、無防備なシマの背中にその巨体を生かしたタツクルを繰り出した。

「クツ……」

背中に受けた衝撃で跳ね飛ばはれたシマだったが、幸い怪我は大きくないようであった。

だが、背中に受けたことにより肺の中の空気が抜けてしまった様な感覚に陥っていた。

「ハア……ハア……」

明らかに酸素が足りなかった。今のシマは肩を上下にさせながら呼吸している。

視線を抱えているイーシャに向ける。

ジンオウガの爪によりオトモ防具は引き裂かれているが、イーシャにはまだ息があつ

た。傷が深いのか未だに目が覚める兆しはない。

だが、シマにとってイーシャが生きていることが励みとなった。

シマは立ち上がるとアイテムポーチを漁り閃光玉を取り出すと、自分の顔を腕で覆いながら自分の足下に叩きつけた。

地面に叩きつけられた閃光玉は眩い閃光を放ち、ジンオウガたちの視界を奪う。

シマはその閃光が消える前にアイテムポーチからモドリ玉を取り出し先程と同じように地面にぶつけた。

そして、ジンオウガたちの視界が戻ってくる頃にはシマとイーシャの姿はそのエリアになかった。

……

……

「……………これは一度村に帰るしかないかな」

現状を考えるとそれが妥当なのかもしれない、シマはそう思ったのだ。

それにイーシャの事も心配であった。いつ状態が悪化するかも解らない状況なのである。

「ふう……………」

シマは荷物をまとめると、溪流に来る際に乗ってきたガーグア荷車に荷物を乗せ自分

はガーグアに跨がり村に向かっていった。



「……すみません。この依頼を達成出来ませんでした。明日、準備を整え再び向かうことにします」

「そうですか……分かりましたわ。それとイーシャさんは治療をしておりますので安心して下さい」

「はい。ありがとうございます」

村長に依頼中に起きた出来事を事細かく説明し、全てを話終えたシマは気を落ち着かせるために浴場に向かっていった。



「はあ……」

シマは湯槽に浸かりながら今後について考えていた。

イーシャが治療を受けている以上、ジンオウガを狩猟するのは自分しかない。

しかし、一人ではあの二匹の狩猟は厳しいだろう。

「困ったな……」

そんなとき……

「あれ？　もしかしてシマさんですか？」

声のした方を向くとそこにはトールが立っていた。

きつと温泉に入りてきたのだろう。

「ん？　ああ、トールくんかい。実はオトモのイーシャが狩りの際に怪我を負ってしまつてね……今は治療中なんだよ。流石に一人ではあの二匹を相手するには心細いかなあ……なんて思つちやつてね」

まあ、自分が悪い点もあるけどね……そう付けたそうと思つたがシマは口を閉じた。そうシマが黙っているトールが口を開いた。

「なら手伝いましょうか？」

「いや……トールくんに迷惑をかけるんじゃない……」

「大丈夫ですよ。困っていたら助け合わないと。人はそうやってモンスターを退けてきたんですから」

トールはそう言った後、苦笑しながら小声で父さんの受け売りですけどね、と呟いた。

「ふう……ありがとう、ツールくん。じゃあ、手伝いお願いするよ」

「はい、わかりました」

「それじゃあ明日の朝、溪流に向かうことにするが大丈夫かい？」

「大丈夫ですよ。それと……狩猟対象は二体なんですか？」

「ああ、そう言えば説明してなかったね。相手はジンオウガだよ。しかも二体だ。大丈夫かい？」

「はい！ それでは明日はお願いします」



シマが部屋に帰ると、治療を終えたであろうイーシャがベッドの上で眠っていた。

その様子を見たシマは安堵からか笑みがこぼれた。

「今日はゆつくり休むといいよ。明日はツールくんとあの二匹にリベンジしてくるから」

そう言つてシマは眠っているイーシャの頭を撫でた。

頭を撫でられた感覚で目が覚めたのかイーシャがシマを見つめてきた。

「ごめんよ、起こしちゃったかな」

「……別に気にしてないニヤ。明日はしっかりと倒してくるニヤよ」

「ああ、わかってるよ」

「それでいいのニヤ。それとその依頼が終わったらマタタビを要求するニヤ」

「……まったく怪我してもイーシャはイーシャだな」

「……どういう意味ニヤ?」

ジト目でこちらを睨んでくるイーシャを見てシマはつい吹き出してしまった。

「ニヤ!!? ニヤんで笑うニヤ!!」

「ははッ、悪い悪い。明日はしっかりと頑張ってくるよ。それと明日は早いしもう寝るとするよ。お休み」

シマは目を閉じると眠りについていった。

「ニヤんか露骨に話を逸らされた気がするニヤ……」

——そして、夜が明けた。

二頭の雷狼竜、そして

溪流に向かうネコタクに乗っている二人だったが、ツールがシマにあることを尋ねた。

「——ところでシマさん。シマさんが溪流で出会ったドスジャギイって妙にチームワークがとれていたらしいですね」

「うん？」

……そう言えばそうだったね。なんというか普通のドスジャギイとは違う行動をみせた……という感じかな」

シマは話に出た妙に統率のとれていたドスジャギイを思い出す。

溪流に生息するモンスターのはかなり熟知しているはずのシマが知らない行動。そして今回のジンオウガ達の行動。

——それは溪流に何かが起きていることを告げていたのかもしれない。

シマは一瞬そう思ったが今回の狩りに集中するために頭の隅に置いておくことにした。

ふと目をやるとネコタクは既に溪流に到着しているようだった。

「さ、この話はここまでにして早く狩りに行こう」

「はー」

二人は武器を持つと、ジンオウガを探すために溪流を進んでいった。

◆◆

溪流を歩き始めて数分、廃屋が点在するエリア4に着いた二人は尋常ではない雷光虫を見るなりシマは双剣を、トールは太刀を構えた。

「どうやらこのエリアにいるようだね。気を付けよう」

「……はい」

二人が武器を構え廃屋を回り込むように移動するとその先に予想通りの相手がそこにいた。

ジンオウガは二人が現れると二人が立っている場所目掛け前肢を叩きつける。

が、二人はそれを読んでいたかのようにその場から回避する。

そして、叩きつけられたジンオウガの前肢に武器による攻撃を与えていく。

「ふっ…」

双剣による連撃をジンオウガの前肢に与えるシマは前回の出来事をまた起こさないように周囲にも気を配りながら戦っている。それは、トールに事前に伝えていたため、

トールもその事に注意しながらモンスターに応戦している。

「はあっ！」

トールは練気を放ち気刃斬りをジンオウガに喰らわせていく。

しかし、ジンオウガもやられるだけではなく、体を捻り一回転する形でサマーソルトを繰り出してくる。

「くっ……」

タイミング悪くその攻撃を受けてしまったトールは立っていた場所から数メートル程飛ばされてしまう。

ジンオウガはそのトール目掛けて追撃を行おうとしたとき、シマがトールとジンオウガの間にあるものを投げ込んだ。

「トールくん！ 目を瞑って！」

「えっ……あ、はい！」

シマに言われてトールが目を瞑った直後、目映い光が辺りに広がりジンオウガの視界を奪った。

ジンオウガが視界を奪われトールを見失っている間に、シマはトールの下もとに駆け寄りトールに回復薬を渡した。

「さ、トールくん。今のうちに回復を」

「ありがとうございます」

トールはシマから受け取った回復薬を飲み干すと再び武器を構えジンオウガに向かつていく。

「さて、こちらも行くよ!」

シマは深く息を吸い込むと掛け声とともに武器を頭の上で構える。鬼人化を行ったシマは脱兎の如くジンオウガに近付き目にも留まらぬ早さで双剣で連撃を与えていく。

ジンオウガはシマの連撃を足に受けすぎたのか、バランスを崩し倒れるように転んだ。その隙を二人は見逃さず、シマは背中を、トールは尻尾を狙っていく。

「イーシャの分も頑張らないとイーシャに顔向け出来ないからね!」

シマがそう一人言のように叫びながらジンオウガを攻撃している時だった。背中に視線を感じた。

「つ……まさか!」

シマが振り向くとまだ離れてはいるものの、今自分たちがいるエリアにもう一体のジンオウガが足を踏み入れていた。そのジンオウガは他とは何処か違う……そんな雰囲気を感じ出していた。しかし、シマは何が違うのか、それに気付く事が出来なかった。

そのジンオウガはシマがまるでこちらに気付くのを待っていたかの様であった。そして、ジンオウガはエリア中に響くほどの雄叫びをあげる。

「っ……!?」なんだこの咆哮……」

シマとトールはもう一体のジンオウガの咆哮にすくんで動くことが出来ない。

そんな二人に先程まで倒れていたジンオウガが起き上がりそのまま体を捻りサマーソルトを繰り出した。

咆哮をあげたジンオウガはまるでその状況を作り出す為だけに咆哮をあげた、その様に感じ取れた。

「はあ……はあ……不味いな……。トールくん。ここは私が時間を稼ぐ。その間に体力の回復をしておいてくれ。……どうやらあの二頭を同時に相手するのは骨が折れそうだな」

ジンオウガによるサマーソルトを受け吹き飛ばされたシマは立ち上がるとトールが回復出来る時間を稼ぐためにジンオウガに向かっていった。

シマが立ち上がってから遅れて立ち上がったトールはシマに言われた通り回復を行った。

(流石のシマさんでも二頭を相手するのはキツイ……。ここは……)

トールはポーチからトラップツールとネットを取り出すとそれらを組み合わせ落とし穴を作り上げた。

そしてその落とし穴を地面に設置し、シマに合図を送った。

「シマさん！ こちらですー！」

トールの合図を受けたシマはその意味を理解したのだろう、トールの下にジンオウガを誘導していく。

うまくジンオウガを落とし穴まで誘導したシマはジンオウガを踏み台にし高く跳躍すると空中から落下しながらジンオウガに連撃を喰らわせていった。

そしてシマの連撃の最後の一撃を受けたジンオウガはそのまま絶命した。

「やつと二頭か……。さ、このままの調子で行くよー！」

「はいー！」

二人がもう二頭のジンオウガに目を向けると、そのジンオウガは周囲の雷光虫を身に纏っている最中であつた。

「不味い！ あのままのペースだと超帯電状態に……！」

シマは半ば自棄^{やけ}になりながら閃光玉を投げた。

「……どうだ?！」

シマとトールは閃光玉の光が消え、前方のジンオウガの姿を確認して息を飲んだ。

——そのジンオウガの姿は輝いており、纏う電気はまるで黄金のように目映いものであつた。

そして、シマが感じた他のジンオウガとは違う雰囲気の正体。それは【大きく捻れた右の角】であつた。

異形の雷狼竜

「……シ、シマさん。あんなジンオウガ見たことありませんよ……」

トールが震えた声で口に出す。確かにトールの言う通り、溪流のモンスターを熟知しているシマでさえあのような個体のジンオウガの事は知らなかった。

「どうやら突然変異の個体……と言ったところかな……。新しい発見だけど流石に嬉しくはないね……」

トールと小声で会話をしながらシマは内心この狩りにトールを巻き込んでしまったことを後悔していた。

(……どうやら面倒な事にトールくんを巻き込んでしまったようだね……)

しかしその事を口に出すよりも今、目の前にいるあの異形のジンオウガを倒さなければいけない。

(……どうやら謝るのはこの狩りの後になりそうだね)

「トールくん。私が時間を稼ぐから君は一度ベースキャンプに戻ってニャン次郎さんに村に緊急の要請を出すように言ってくれ」

「そ、そんな……シマさん一人でアイツと戦うっていうんですか!？」

「ああ、だからこそ君にしか頼めないんだ。

……頼んだよ」

シマは自身に活を入れると黄金に輝くジンオウガに向けて走り出した。

そして、ツールはシマを一人残す事に罪悪感を覚えながらシマに言われた通り、ベースキャンピングに向かう事にした。

◇◆◆

「ハアツ!!」

ジンオウガに攻撃を繰り返したシマだったが、シマが向かって来ることに気付いたジンオウガも半身を反らしシヨルダータックルを繰り返す。

「ぐっ……」

武器を振り始めていたシマはその攻撃を避けれるはずもなく、直撃し弾き飛ばされてしまう。

シマはすぐ体勢を立て直し、立ち上がるがそのシマに向けジンオウガの右前脚が迫ってきていた。

「ッー」

寸での所で避けたシマは少しでも距離を取ろうと走ってその場から離れる。

シマは今までの経験からジンオウガは距離を取ると雷光虫弾を放つ事を知っていた。

（雷光虫弾を放ったその際に接近して連撃をくらわせるしかない……）

しかし、シマが予想していた雷光虫弾とはこのジンオウガの軌道は全く別のものであつた。

（なっ……!? 確実にこちらを狙っている!?）

雷光虫弾の軌道は直進し途中で曲がるものだと思っていたシマは空中で曲線を描きながらこちらに向かって来る雷光虫弾に驚き、反応が遅れてしまった。

雷光虫弾が直撃し、全身に雷が走ったような感覚がシマを襲った。雷光虫弾を受けたことにより、雷属性やられ状態になったシマは体が痺れる事により上手く手に力が入らない。

（予想以上の強さだね……。ここはモドリ玉で一時的に撤退するしかないね……）

シマがアイテムポーチからモドリ玉を取り出し使おうと地面に叩きつけたその時、ジンオウガが咆哮をあげその咆哮に怯んでしまったシマはその場から離れることが出来なかつた。

「……どうやらコイツは相当厄介な相手になりそうだね」



「はあ……はあ……」

シマに言われベースキャンプの目前まで走ってきたトールは息を整えるため一度足を止めた。

「……………ふう。行こう」

呼吸が整ったトールはベースキャンプのニャン次郎の下に駆けていった。

「……………と言うことなんです。村長さんに伝えて頂けませんか？」

「ふむ…………シマがそう言うなら確かに危険ニヤ可能性があるニヤ。」

わかったニヤ。この事を確りと村長さんに伝えさせて頂やすニヤ」

「頼みます！ それと村にいるユーカーってハンターにも声をかけて頂けませんか？」

「？ 了解したニヤ。それじゃあ、ご免ください。」

そう言つてニャン次郎は脱兎の如くの速さで村に向かって行った。

「さて…………」

トールは自分の頬を軽く叩くとシマがいるであろうエリアに向かつて行った。



「……………ふむ。コイツの攻撃は下手をしたら数発で意識を持つていかれそうだね

つと、冷静に観察してる場合じゃないね」

あれからシマはあのジンオウガの行動を出来るだけ探ろうと攻撃はせず避けることに専念していた。

しかし、無傷で済むはずもなくシマの身にマギクルSシリーズ纏う装備にはあちこち鎧の割れ等が目立っていた。そして右腕を護っている防具は完全に壊れており、インナーが見えている。

それほどあのジンオウガの攻撃が凄まじい事を語っていた。

「しかし、アイツが自身の帯電を放ってきたときは驚いたね。とつさに右腕で顔を庇ったら防具が粉々になるなんてね……」

そう言つてシマは自分の右腕を見る。インナーが見えている右腕はこのまま攻撃を受けてしまえば二度と使い物にならなくなってしまうだろう。そうなればハンター業を辞めることになるだろう。しかし、それだけは避けたい。シマがそう考えていると轟音と共にエリア内にあつた廃屋が崩れていく。

「ふむ。鬼ごっこはここまでのようだね」

シマは武器を構えるが、先程までの影響か体にあまり力が入らない。

ジンオウガが前脚をシマに向け振り下ろそうとしたとき、角笛の音色が聴こえてきた。

「つ……まさかー！」

音のする方に目をやるとそこにはトールが角笛を持って立っていた。

角笛の音色を聴き、標的をトールに変えたジンオウガはトールに迫っていく。

「トールくん！ 危ない！ 早く逃げるんだ！」

シマは大声で叫ぶがトールはその場から全く動かない。そしてジンオウガがトールの目前に迫った時、ジンオウガが地面に埋まったのだ。

そして無防備になったジンオウガにトールは氣刃斬りを繰り出していく。

「ツ！ ……ハアツ!!」

トールは一旦下がったのち前方のジンオウガ目掛け太刀を回して切り抜けていく。そして時間をおいてからトールが切りつけた場所の傷口が一斉に開き血が吹き出した。

しかし、それでも致命傷にならなかつたのか落とし穴から這い出てきたジンオウガはまだ疲れた様子も見せなかつた。しかし、先程の技で折れたのだろう、あの立派な角が折れていた。

トールは太刀を納めると急いでその場を離れシマの下に向かった。

「シマさん、大丈夫で……って右腕の防具はどうしたんですか!？」

「はは……、まあ後で話そう。とりあえず今はアイツをどう対処するか、だ」

疲れも治まってきたシマは再び武器を握るとジンオウガの方に目を向ける。

「トールくん。アイツの攻撃は普通のジンオウガとは格が違う。下手に攻撃を受ければ私の鎧のようになるだろう。気を付けながら立ち回るんだ」

「分かりました。……それとシマさん、無理なさらないでください」

そう言つてトールはシマに秘薬を渡すとジンオウガに向かって行った。

シマはトールから渡された秘薬を見て呟いた。

「年下に心配されるようじゃまだまだのようだね……い」

シマは秘薬を飲み干すとトールを追うようにジンオウガに向かって行った。

金の雷光纏いし雷狼竜

目の前で金の雷光を纏った異質なジンオウガの圧倒的な雰囲気には押しながらも、武器を構える。

「……こんなに離れているのに空気を通してビリビリと電気を感じるってのはやっぱり異常だね……」

「ですね……」

シマの言葉に頷くトール。一体どういう理由であの個体が生まれたかはわからないが、異常だということだけははっきりと理解できた。このままあのジンオウガを放っておけばユクモ村に被害が出かねない。だが、仮にも相手は未知の個体。うかつに動けないのも事実だ。

だが、なぜか件のジンオウガはこちらを見つめたまま一向に攻めてこない。まるでハンターを見下すように、自分が上だと表すような態度だ。

「……どうやらあのジンオウガは挑発してるみたいだね。ハンターなんて相手じゃない、みたいな雰囲気だ。でも怖気づいてばかりじゃダメだね。行くよー！」

「はー……」

自分に臆せず向かってくる二人に応えるかのようにジンオウガも飛び掛かっていく。

前脚をシマに狙いをつけ叩きつける。が、シマもその叩きつけを見切りジンオウガとすれ違うように避け、その前脚とすれ違いざまに刃をぶつけていく。

(さつきは甘く見たがどうやら行動は普通のジンオウガとさほど変わりはないみたいだね。 だけど……)

シマは先ほどジンオウガにぶつけた旋風連刃の刃先を確認する。明らかに欠けている。それは、ジンオウガの前脚の驚異的な硬さを表していた。

(下手に前脚に攻撃をすればこちらの武器がダメになってしまうわけか)

しかし、前脚が硬いと言ってジンオウガの背後に回り込めるほど隙があるわけではない。さらに、無双の狩人と呼ばれるジンオウガが大きな隙を晒すとも言いがたかった。ツールに目を向けると、同じようにジンオウガの前足の驚いている様子だった。

「シマさん！ このジンオウガの前脚が！」

「ああ！ わかつてる、尋常じゃない硬さだ！」

いったん距離を取り戦況を立て直そうと考えるが、ジンオウガの猛攻はやむことがない。下手に研いではまえばその隙にやられる可能性もあった。少しでも柔らかい部位を狙い攻撃を続けていく。が、

(——ッ！ さすがに刃先が欠けてちゃダメだな……どこかで研ぐ必要があるね

……)

刃が欠けた武器ではまるでと言っていいほどジンオウガにダメージを与えられていないようである。が、その時ジンオウガが自ら距離を取った。そして

『オオオ——ッ!!』

ジンオウガが雄叫びを上げる。突然の咆哮に耳を抑えるシマ。それはツールも同じであり、二人揃って隙を晒してしまっていた。が、ジンオウガは攻めてこない。咆哮で耳をやられないように抑えながらジンオウガを睨みつける。咆哮の拘束から立ち直った二人は追撃を喰らわないように身構える。が、視線の先のジンオウガは二人の予想を超える行動をし始めた。

「なっ!?!」

帯電し始めたのだ。予想外の行動に二人は息を?む。

すでに帯電状態であるジンオウガが更に帯電を行うなど一度も聞いたことが、確認されたことがなかったのだ。そして、帯電を終えたジンオウガの姿は先ほどよりも眩い金の雷光を放ち、体毛、爪などが金色に輝いている。まるで先ほどまで本気ではなかったかのようなのである。

「金の雷光を纏う雷狼竜……か」

シマは冷静な態度を取るが、武器を握るその手は明らかに震えていた。だが、モンスターに怯えていてはハンターとして失格である。それに村で休んでいるイーシャの仇でもあるジンオウガに臆してはダメだ。そう自分に言い聞かせる。

「相手が本気を出した……てことはあのジンオウガにとって外敵として認められたってことでいいかな？」

「……あはは、シマさんさすがに笑えないですよそれ……」

「ごめんごめん、一旦ベースキャンプに退避しようかと思ってるんだけど大丈夫かな」「大丈夫ですよ、時間は僕が稼ぎます。だから任せてください」

「……ありがとう、出来るだけ早く戻るよ」

シマはポーチからモドリ玉を取り出し地面にぶつける。緑の煙幕が立ち込めるとシマの姿はエリアから消えた。トールはそれを確認すると武器を握る手に力を籠める。

「……さて、シマさんが戻るまで僕は——俺は負けない」

トールに応えるかのようにジンオウガは威嚇の咆哮を上げた。